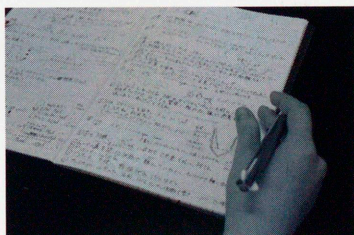
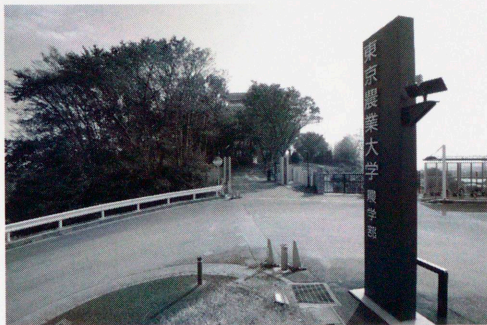


ふじみの

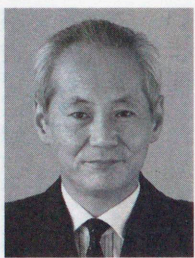


No.52
東京農大畜友会



巻頭言

畜産学科長 半澤 恵



今を大切にして下さい。そして笑顔を忘れずに、自分の夢に向かって堂々と胸を張って生きてください。皆さんの活躍を心から祈念しています。そして、たまには帰巣本能を発揮して厚木キャンパスに訪ねてきてください。畜友会はいつでも皆さんの帰りを待っています。

在校生の皆さんは、この節目の機会にこれまでの大学生活を振り返り、自分の将来設計を見直し、目指すゴールを再確認した上で、勉学、課外活動、様々なことに思い切ってチャレンジしてください。特に収穫祭に中心メンバーとして携わっている面々は、着々と成果が挙がりつつある昨今、先輩達の残した記録ではなく、記憶を大切にし、自らのオリジナリティを信じ、みんなの力を集約して目標に挑戦してください。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。心よりお祝い致します。本誌「ふじみの」には、先生方、学生諸氏による寄稿文に加えて研究室、収穫祭など、畜産学科に関する様々な情報が満載されています。畜友会は、畜産学科の学生を正会員、大学院生や教職員を特別会員とする親睦団体で、新入生歓迎会から、収穫祭・体育祭、卒業生送別会まで、様々な企画で大学生活を楽しく充実したものにしてくれます。皆さんも畜友会の活動にも積極的に参加し、生涯の仲間をつくり、たくさんの方の貴重な体験をしてください。

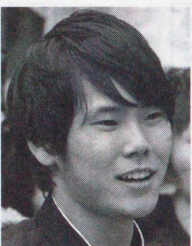
大学生の目標は、受け身になって授業を受けて優秀な成績を修めることではありません。専門分野に関する知識・技能の修得に努めるのはもちろんのこと、社会人としての目標を見出し、必要な素養を養い、学び方、考え方を確立し、自分で課題を発見し、それを解決する力や、新たな価値を創造する力を身につける時間と場を提供してくれます。積極的な態度こそが、真に充実した楽しいキャンパスライフにつながります。4年後の自分に期待できるような充実した時をすごされることを祈念しています。

結びに、本誌発刊にあたって、快くご寄稿下さった皆さま、並びに編集に携わった畜友会の役員諸氏および関係各位に心より感謝申し上げます。

平成二十八年三月吉日

ふじみの発刊にあたり

畜友会委員長 入江駿 敬



冬の寒さも和らぎ、桜前線の待ち遠しい今日この頃、今年も「ふじみの」第52号を発刊することとなりました。

本誌には、畜産学科の先生及び、学生の手稿や昨年度の事業報告を記載しています。

昨年は、新学生会館の設立や「厚木キャンパス農友会」となり、新しい厚木キャンパスの始まる中、少し困惑する部分もありました。しかし、その不安に負けない学生一人一人の夢、希望が感じられる文章が載せられています。

是非、隅々までご覧いただけたら幸いです。

ふじみの

目次

巻頭言

畜産学科長 半澤 恵 1

ふじみの発刊にあたり

畜友会委員長 入江 駿敬 3

同窓会だより

「ふじみの」第52号発行によせて
畜産学科同窓会会長 栗原 良雄 6

畜産振興会

東京農業大学畜産振興会 便り
畜産振興会会長 半澤 恵 7

研究室だより

畜産繁殖学研究室 9
 家畜育種学研究室 11
 家畜生理学研究室 14
 家畜飼養学研究室 16
 畜産物利用学研究室 19
 家畜衛生学研究室 20
 畜産マネジメント研究室 23

ふじみの寄稿原稿(教員)

32年間の農大教員生活を振り返って 鈴木 敏郎 25
 畜産学科の一員になって 入澤 友啓 27
 東京農大の一員になって 鳥居 恭司 29
 東京農業大学の教員となって 小林 朋子 30

集う学友

人の輪に感謝 4年 玉川伊代菜 32
 いつかのために、今しかできない、農大生。

大学生活 3年 大澤 将弥 33
 2年 石川 和子 34
 1年 石見 菜奈 35
 重厚な大学生活

畜友会だより

平成二十七年畜友会活動報告 36
 平成二十六年畜友会決算報告 37
 平成二十六年度収穫祭特別会計収支決算報告 38
 平成二十七年畜友会予算 39
 平成二十七年収穫祭特別会計予算 40
 平成二十七年畜友会役員 41
 第十六回厚木キャンパス収穫祭 42
 第一二四回体育祭事業報告及び結果報告 44
 東京農業大学農学部畜産学科「畜友会」会則 50

第十六回厚木キャンパス収穫祭・
第一二四回体育祭各部門委員長より

ホンマ、おおきに 統一本部委員長 3年 入江 駿敬 56
 変な人たち 特別企画委員長 3年 金子 泰昭 57
 宣伝隊部門委員長より 宣伝隊隊長 3年 綿貫 浩志 58

これぞ畜産学科が誇る神輿 神輿隊長 3年 小川 直輝 59
 第124回体育祭 体育祭委員長 3年 江田 匠 60

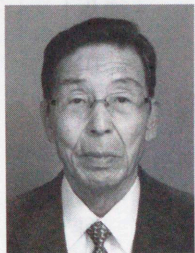
収穫祭を終えて 櫓裝飾委員長 3年 押木 茜 61
 第16回厚木キャンパス収穫祭 裝飾委員長 3年 小野 美晴 62

家畜苑 家畜苑苑長 3年 興梠 史也 63

編集後記

編集委員長 3年 敷地 生光 64

同窓会だより



「ふじみの」第52号発行によせて

東京農業大学農学部畜産学科同窓会

会長 栗原良雄

「ふじみの」第52号発行おめでとうございます。卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

これからは畜産学科同窓会のメンバーとして社会で活躍されるわけです。

これまでの4年間はどうか。充実していましたか。これまでに学んだことをいよいよ実践する機会が来たわけです。これからは一人ひとり活躍する環境は異なります。その中でこれまで学んだことをいかに生かすか、また、与えられた仕事に真剣に取り組む着実に成果を上げ、信頼を得るように頑張ってください。いずれにしても健康が第一です。

あなた方は次の時代を担う大事な人材です。どうか健康には気を付けて頑張ってください。期待しています。

新入生の皆さんご入学おめでとうございます。これから4年間農業大学畜産学科で学ばれるわけです。皆さんはそれぞれ夢を持っていることと思います。その夢に向かって挑戦して下さい。とにかくこれからの4年間、勉強はもちろんのことクラブ活動、趣味、中にはアルバイトをしなければならぬ人もいます。いずれにしても無為に過ごすことなくまず挑戦を試みてください。

さらに、善き友を持つことです。学生時代に得た善き友は一生の宝です。

最後になりましたが、これまで畜友会の役員をされた方、大変ご苦労様でした。収穫祭をはじめ諸活動でいろいろな苦労があったと思います。この中で得るものも多かったと思います。これをこれからの生活に生かしていただく

い。現在役員をされている方、これから何かと苦労が多いと思いますが、畜産学科学生のリーダーとして頑張ってください。期待をしています。

同窓会もこれからも皆さんの応援ができるよう努力をしていきます。

以上

平成二十七年十一月

畜産振興会



東京農業大学畜産振興会 便り

東京農業大学畜産振興会

会長 半澤 恵

東京農業大学畜産振興会が発足して、早二十五年が経ち「ふじみの」に便りを執筆する時期となりました。そこで改めて本会の発足の経緯やこれまでに実施した事業について紹介します。

本会は東京農業大学農学部畜産学科及び大学院農学研究科畜産学専攻に所属する学生の教育・研究の向上に資するために、平成三年三月二十三日に学校法人東京農業大学の認可を得て設立されました。会の運営には学内外の卒業生ならびに学科教員を中心に本会の役員として理事、監事が選任され、理事会で必要事項が審議決定され、運営にあたっています。一方、役員以外の評議員によって評議員会を組織し、理事会での審議・決定内容について承認を得ること

なっています。

具体的な事業内容として、平成二十八年一月現在、奨学生証を毎年二、四年次生、平成二十五年より各学年二名ずつ計六名に改訂、延べ八十五名採用、優秀卒業論文賞を毎年一名、計二十五名に授与、姉妹校短期留學生並びに渡米農業実習生への交通費の一部を過去八名に支給、さらに関連学会誌に学術論文を掲載・発表した学生、または学会で口頭発表した学生、延べ二百七十五名を奨学しています。また、経済的に困窮した学生への奨学金の一時貸与も行っています。

平成九年四月にここ厚木キャンパスが開学し、畜産学科が移転しましたが、本年三月には厚木キャンパス育ちの第十五期の学科学生ならびに第十三期の博士前期課程大学院生、第十期の博士課程後期大学院生が卒業します。平成二十七年十月には新学生会館が開館し、また、一昨年よりコンビニエンスストアも導入されるなど、キャンパスの整備も徐々にすすんでおります。しかし移転から二年間は、教員が世田谷キャンパスにあり、厚木キャンパスは学生のみという状態でした。そこで本会では、学生への教材提供の意味から平成九年には乳用子牛雌一頭、同十年にはリヤマ雌一頭、雄一頭、そして同十一年には黒毛和種子牛一頭を寄贈しました。これらの家畜はいずれも、厚木キャンパスでお披露目の後、本学富士畜産農場に繋養されました。リヤマは毎年収穫祭の折に畜産学科統一本部で実施する家畜苑の時に人気者になっています。黒毛和牛は優秀な子孫も誕生するなど、それぞれ実習・実験の材料として活用さ

れています。

また、これら諸事業の成果を取り纏めたものを平成十年より振興学会誌として発行しており、こちらも十七号を数えるまでになりました。

本会設立の契機は平成二年十二月一日、不慮の交通事故により残念にも尊い一命をなくされた江渡宗徳君(当時畜産学科二年在学中)のご両親から寄付を賜った原資を基金として設立されましたが、その後、逐次拡大してきた事業を遂行するため、

- 一 東京農業大学畜産学科同窓会からの寄付金(設立時)
 - 二 賛助会員会費(受領実績・延べ八百六十四名)
 - 三 一般寄付金(受領実績・延べ百十一名)
- などを資産に加え賄われています。

卒業生には本会の趣旨をご理解いただき、後輩学生の育成のため是非ご支援を賜りたくお願いいたします。特に本会から表彰を受けた方々は本会の活動を心に留めおいて下さい。

在学生諸君には本会の目的に叶う事象が生じた場合には本会を有効に活用され、充実した学生生活を送られるよう祈念し、振興会便りいたします。

研究室だより

家畜繁殖学研究室

家畜繁殖学研究室は桑山岳人教授、岩田尚孝教授、白砂孔明助教のご指導のもと、大学院生八名、四年生三十三人、三年生三十六名で構成され、学生同士で協力しながら日々の研究に取り組んでいます。

当研究室では、家畜(ウシ、ブタ、ニワトリ、ウズラ)を利用して生殖生理のメカニズムを追求し、繁殖効率の改善に取り組んでいます。具体的には、生殖に関わる内分泌機構の解明、動物胚の生産や操作、細胞、人工授精、受精卵移植の繁殖技術の確立を目指しています。

三年生は、生殖学の基礎的な知識、実験方法を身に付けると共に、大学院生や四年生と究活動を行い興味のある研究分野について理解を深め、研究テーマを決定します。

当研究室では国内や海外で行われる学会にも積極的に参加し、その成果を論文として関連学会に発表しています。

研究室の主な年間行事は、新入室員歓迎会(四月)、論文発表会(年数回)、収穫祭の文化芸術展での研究発表、スポーツ大会(年一回)、研修旅行、卒業生送別会等があります。

家畜繁殖学研究室は日々の研究、勉強と楽しい行事を両立しながら充実した研究室生活を送っています。

公式HP (<http://hansyokuken.wix.com/hansyokuken>)
Facebook (<https://ja-jp.facebook.com/nodai.c613>)

氏名 卒業論文題目

指導
教員

有馬 萌 雄ニホンウズラの拘束ストレスに対する
コルチコステロン分泌反応の個体差に
ついて 桑山 白砂

石田 和真 矮鶏の繁殖期における親行動への雄の関与
について 桑山 岩田

市之瀬智也 ブタ卵内の脂質量に関連する分子メカニズム 桑山 岩田

伊藤 一樹 体外培地の量がウシ初期胞状卵由来卵子の
体外発育に及ぼす影響について 桑山 岩田

伊藤小百合 インフラマソーム活性化に及ぼす
レスベラトロールの影響 岩田 白砂

猪股 瑛生 酸素濃度の気相条件がウシ顆粒層細胞に
及ぼす影響 岩田 白砂

尾内 晶 ブタ卵子の体外成熟中の脂質含有量に
及ぼす卵胞液の影響 岩田 白砂

大津 彩華 AGEがマクロファージの炎症性
サイトカイン産生に及ぼす影響 桑山 白砂

奥田 淳史 白色レグホンと岐阜地鶏の交配により
作出された個体の就巢行動の発現状況に
ついて 岩田 桑山

小川 佳織 ブタ卵胞液中の遊離脂肪酸が卵子に及ぼす
影響 岩田 桑山

長田 小菊 培養基質の硬さがブタ初期胎卵胞卵
子の体外発育に及ぼす影響 岩田 桑山

小田島 翔 西日本地域の大学における繁殖関連の
研究動向について 岩田 白砂

川村 美樹 脂質量とATP量に着目したブタ卵
子の体外発育条件の最適化 岩田 白砂

小林 彩 レスベラトロールがウシ初期胚の発生に
及ぼす影響 岩田 白砂

小林 識子 国内の生殖生理学研究の動向につ
いて 岩田 桑山

小林 由佳 脂質量とATP量に着目したブタ卵
子の体外発育条件の最適化 岩田 桑山

佐藤みつほ ブタ卵子が含有する脂質量の体外成熟中
の動態について 岩田 桑山

遠山 桃子 矮鶏の産卵期、抱卵期、休産期における
血漿コルチコステロン濃度について 桑山 白砂

西山 知里 インスリン添加がウシ初期胎卵胞卵
子の体外発育に及ぼす影響 岩田 桑山

原 友孝 ウシ卵子への体細胞由来ミトコンドリア
の注入に関する基礎条件について 岩田 桑山

比佐奈緒子 顆粒層細胞追加がブタ初期胎卵胞卵
子の体外発育に及ぼす影響 岩田 白砂

堀内 優花 ウズラの卵巣除去が拘束ストレスによる
コルチコステロン分泌反応に及ぼす影響 桑山 白砂

増田 康司 加齢がウシ卵子の体外成熟中の脂質動態
に及ぼす影響 岩田 白砂

寄田 直伸 トリヨードサイロニンと抱卵斑形成との
関係 桑山 岩田

澁谷 唯 レスベラトロールの炎症制御メカニズム
に関する研究 岩田 白砂

島村 成美 ヒト胎盤細胞における低酸素応答性の
検討 岩田 白砂

城詰 完奈 顆粒層細胞の追加がウシ初期胎卵胞
由来卵子の体外発育に及ぼす影響 岩田 白砂

鈴江 友護 ヒト胎盤細胞におけるIFNTの
サイトカイン分泌に及ぼす影響 桑山 白砂

隅谷 明依 顆粒層細胞の量が卵子の質に及ぼす影響
岩田 白砂

妹尾 琴美 ヒト胎盤細胞(SWT1)におけるAGE・
HMGBIは炎症を惹起する 桑山 白砂

鷹野 弘樹 パルミチン酸は胎盤細胞の炎症反応を
惹起するか? 桑山 白砂

瀧本 敦子 長期閉鎖系の白色レグホンにおける基礎
データの調査 岩田 桑山

寺田 文 拘束ストレスによるコルチコステロン
分泌反応のニワトリ品種間の比較 桑山 白砂

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、
育種学、分子生物学的見地から広範囲にわたる研究活動が
実施されています。

当研究室では、古川力教授をはじめ、野村こう准教授、
高橋幸水助教の指導の下、大学院生5名、4年生29名、3
年生33名によって構成され、室員各自の自覚と相互の協力
によりそれぞれの目標に向かって日々研究が続けられてい
ます。主な研究テーマとしては家畜(ウシ・スイギュウ・
ヒツジ・ブタ・ヤギ・イノシシ)を供試動物として、マイ
クロサテライトマーカーやミトコンドリアDNA遺伝子
情報による連鎖地図作製、系統遺伝学的研究や、統計遺伝
学に関する研究などが行われています。

研究室では一年を通して新入室員歓迎会、定期総会、収
穫祭への参加、研修旅行、特別講演会、卒業論文発表会な
どが行われ、室員は実験動物の管理、毎週行われているゼ
ミ、定例室員会、それぞれのテーマに即した研究などを日々
行っています。さらに研究活動は学内にとどまらず、先生
方や院生により学会発表などが精力的に行われています。

氏名	卒業論文題目	指導 教員
石川 真優	日本におけるマンクスロフタン種の 遺伝的多様性	古川 熊谷 俊太 神津牧場におけるジャージー種の泌乳能力 の解析
岩佐のぞみ	マイクロサテライトDNA多型情報に 基づくウシの系統遺伝学的研究	古川 小山 陽平 ニホンイノシシ集団における遺伝的多様 性とブタ遺伝子の流入に関する研究 〜ブタ遺伝子流入判定マーカーの開発〜
宇田川美侑	神津牧場におけるジャージー種の泌乳能力 の解析	古川 佐藤 史哉 ニホンイノシシ集団における遺伝的多様 性とブタ遺伝子の流入に関する研究 〜ブタ遺伝子流入判定マーカーの開発〜
梅津 直丈	ミトコンドリアDNA全塩基配列情報に 基づく家畜スイギュウの系統遺伝学的 研究	古川 宿谷 泰地 ニホンイノシシ集団における遺伝的多様 性とブタ遺伝子の流入に関する研究 〜ブタ遺伝子流入判定マーカーの開発〜
大橋 右	ミトコンドリアDNA全塩基配列情報に 基づく家畜スイギュウの系統遺伝学的 研究	古川 鈴木 翔太 ヤギの季節繁殖関連遺伝子の多型解析
岡崎 永実	マイクロサテライトDNA多型情報に 基づくウシの系統遺伝学的研究	古川 竹内 勇太 ヤギの季節繁殖関連遺伝子の多型解析
川崎 諒子	ニホンイノシシ集団における遺伝的多様 性とブタ遺伝子の流入に関する研究 〜ミトコンドリアDNA及び核遺伝子 を用いた解析〜	古川 永井千衣子 マイクロサテライトDNA多型情報に 基づくウシの系統遺伝学的研究
中桐 章吾	神津牧場におけるジャージー種の泌乳能力 の解析	古川 山内 彩 マイクロサテライトDNA多型情報に 基づくヤギの系統遺伝学的研究
中島 大輝	ニホンイノシシ集団における遺伝的多様 性とブタ遺伝子の流入に関する研究 〜ミトコンドリアDNA及び核遺伝子 を用いた解析〜	古川 山口 隼 ニホンイノシシ集団における遺伝的多様 性とブタ遺伝子の流入に関する研究 〜ミトコンドリアDNA及び核遺伝子 を用いた解析〜
中谷あかね	マイクロサテライトDNA多型情報に 基づくヤギの系統遺伝学的研究	古川 吉田 泉 ニホンイノシシ集団における遺伝的多様 性とブタ遺伝子の流入に関する研究 〜ブタ遺伝子流入判定マーカーの開発〜
西崎 太郎	日本におけるマンクスロフタン種の遺伝的 多様性	古川 和田 愛 マイクロサテライトマーカーを用いた ヤギ連鎖地図作製に関する研究
糠谷 悠二	日本におけるマンクスロフタン種の遺伝的 多様性	古川 渡来 奈穂 スイギュウ血清アルブミン遺伝子の多型 解析
原 諒	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の多型 解析	古川 野村 高橋
響 孝太郎	ヤギの季節繁殖関連遺伝子の多型解析	古川 野村 高橋
松村 草汰	神津牧場におけるジャージー種の泌乳能力 の解析	古川 野村 高橋
武笠 友美	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の多型 解析	古川 野村 高橋

串田 拓也	日本におけるマンクスロフタン種の遺伝的 多様性	古川 野村 高橋
熊谷 俊太	神津牧場におけるジャージー種の泌乳能力 の解析	古川 野村 高橋
小山 陽平	ニホンイノシシ集団における遺伝的多様 性とブタ遺伝子の流入に関する研究 〜ブタ遺伝子流入判定マーカーの開発〜	古川 野村 高橋
佐藤 史哉	ニホンイノシシ集団における遺伝的多様 性とブタ遺伝子の流入に関する研究 〜ブタ遺伝子流入判定マーカーの開発〜	古川 野村 高橋
宿谷 泰地	ニホンイノシシ集団における遺伝的多様 性とブタ遺伝子の流入に関する研究 〜ブタ遺伝子流入判定マーカーの開発〜	古川 野村 高橋
鈴木 翔太	ヤギの季節繁殖関連遺伝子の多型解析	古川 野村 高橋
竹内 勇太	ヤギの季節繁殖関連遺伝子の多型解析	古川 野村 高橋
永井千衣子	マイクロサテライトDNA多型情報に 基づくウシの系統遺伝学的研究	古川 野村 高橋
山内 彩	マイクロサテライトDNA多型情報に 基づくヤギの系統遺伝学的研究	古川 野村 高橋
山口 隼	ニホンイノシシ集団における遺伝的多様 性とブタ遺伝子の流入に関する研究 〜ミトコンドリアDNA及び核遺伝子 を用いた解析〜	古川 野村 高橋
吉田 泉	ニホンイノシシ集団における遺伝的多様 性とブタ遺伝子の流入に関する研究 〜ブタ遺伝子流入判定マーカーの開発〜	古川 野村 高橋
和田 愛	マイクロサテライトマーカーを用いた ヤギ連鎖地図作製に関する研究	古川 野村 高橋
渡来 奈穂	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の多型 解析	古川 野村 高橋

家畜生理学研究室

家畜生理学研究室は半澤恵教授をはじめ、平野貴准教授、原ひろみ助教のご指導のもと、大学院生3名、学部4年次生32名、3年次生33名で構成されています。

本研究室では家畜・家禽に発現する生理的な特徴やその生理機構の遺伝的支配に関する研究をしています。今年はその研究対象動物はウシ、ウマ、ヒツジ、ニワトリ、ニホンウズラ、ダチョウです。

学年毎の活動として、3年次生は生理学に関する基礎的な知識、技術を身につけるために講義、ゼミ、実験実習、2泊3日の富士農場実習を行い、日常的な実験動物の管理、院生、学部4年生の卒業論文の補助とともに実験別の知識を得るために夏休み直前から課題別実験を行います。4年次生はこれまで得た知識、技術をもって各々が興味を持った研究を引き継ぎ、あるいは新規のテーマを先生との議論により決定し、卒業論文に取組んでいます。院生は各々の学位論文のテーマで日夜研究に取り組んでいます。年間の主な行事は新入室員歓迎会、卒業生との交流会、収穫祭模擬店、研修旅行、課題別実験成果発表会、卒業論文発表会、卒業生歓送会、年2回の納会、年1回の畜舎大掃除、週1回のゼミナールがあります。

氏名 卒業論文題目 指導員

三瓶かすみ	競技馬の運動内容および状態別における赤血球膜浸透圧脆弱性と血液性状の変動の比較解析	半澤
石井 梓	寒天培地培養法とメタゲノム解析法により得られるニホンウズラ腸内細菌叢データの比較解析	原野澤
岩瀬 早人	RBP4 遺伝子多型と黒毛和種の脂肪交雑との関連解析	平野澤
岡田 晃	ワクチン卵を生産する種鶏における抗ウイルス遺伝子の多型解析	半澤
奥村 真由	ニホンウズラ Y および P 系の TL1R2type1 遺伝子のタイプ特異的配列の多型解析	原野澤
柏木 裕治	植物性レクチンを用いたニホンウズラ赤血球凝集原に関する研究	原野澤
勝岡 美祐	RNAseq を用いた黒毛和種の脂肪交雑関連遺伝子探索	平野澤
神山 夏実	ニホンウズラ <i>Mt</i> 遺伝子の臓器別 mRNA 発現	半澤

川上俊太郎 ニホンウズラ CD1 遺伝子領域の組み換え位置の検索 平野澤

川村 友彦 黒毛和種の RBP4 遺伝子多型の探索 平野澤

財前 明昇 ニホンウズラ HSPA2 S 5'UTR と ORF の多型解析 半澤

佐々木康二 メキシカンヘアレスピッグの被毛数に関する遺伝領域の検出 平野澤

里見 一真 ニホンウズラ *C/CD1* 遺伝子座の多型解析 平野澤

清水 奈央 ウマ赤血球系幹細胞の二段階液体培養による増殖分化に関する研究 原野澤

霜田 直人 ダチョウ (*Struthio camelus*: Sc) HSP70 遺伝子 (SchSPA2) 塩基配列の解析 原野澤

菅原礼太郎 FEZL 遺伝子と CD14 遺伝子多型と SCS および産乳形質の関連 平野澤

関 悠香梨 スクレイピーの多型解析 半澤

高島 悠人 SCD 遺伝子多型と黒毛和種の脂肪交雑との関連 平野澤

高野 賢一 競技馬の運動内容および状態別における赤血球膜浸透圧脆弱性と血液性状の変動 半澤

鳥飼 尚之 野菜流通調査 原野澤

鳥越 雄斗 ウシ29番染色体にマッピングされた黒毛和種子牛死産の原因遺伝子探索 平野澤

中山 晶保 ウマ赤血球系幹細胞の二段階液体培養法による増殖分化に関する研究 原野澤

西内 一貴 市販ヨーグルトに検出される乳酸菌と *Bifidobacterium* の調査 原野澤

楢井 大樹 ニホンウズラの個体識別におけるマイクロサテライトマーカーの探索 平野澤

星野 孝輔 メキシカンヘアレスピッグを用いた皮膚色に関する遺伝子領域の探索 平野澤

松元 直紀 競技馬の運動内容および状態別における赤血球膜浸透圧脆弱性と血液性状の変動 半澤

室山 仁美 ホルスタイン種子牛死産の候補原因遺伝子の検索 平野澤

吉井 郁哉 熱ショックタンパク質HSP70ファミリー

の調査

原 半澤

李琦

ニホンウズラ腸内細菌叢のメタゲノムデータの利用解析
原 半澤

家畜飼養学研究室

飼料と管理、栄養の3本柱を中心に環境への配慮も含め安全で効率的な畜産物の生産をめざし追求しているのが家畜飼養学研究室です。本研究室では、脂肪をエネルギーとして燃焼するのに必要なカルニチンや抗酸化作用を持つカテキンなどを与えた際に家畜に及ぼす影響を研究しています。他にも、作物茎葉などの未利用資源の飼料化、飼料組成に基づくアンモニアガスの揮散抑制など幅広く研究しています。

各研究は池田周平教授、黒澤亮助教授の指導のもと日々研究を行っており、卒業論文としてはもちろん、成果は学術研究会の場で毎年発表されています。

研究室活動は、室員交流や団結のための歓迎会や納会など様々な行事、家畜生産現場へのインターンシップ、飼料成分分析実験、収穫祭への参加(本年度文化芸術展・動物のレストラン)などがあり、研究室生活は充実し室員は楽しく過ごしています。先生方は実験や実習の場でも、事業においても時に厳しくご指導を頂けるので、勉学や飼養管理技術のみならず社会人としてのあり方まで学ぶことができます。

氏名 卒業論文題目 指導教員

池上 健人 和牛にペパーミントを給与した際の牛糞へのハエ飛来数に対する効果 野田

磯口 芽衣 大豆皮添加飼料の摂取がMYB種肥育後期豚の肉質に及ぼす影響 黒田

今村 季 ムラサキ芋エキス添加飼料の摂取がラットの粗脂肪に及ぼす影響 黒田

牛久保 謙 イカスミ添加飼料の給与がラットの糞尿由来アンモニア揮散量に及ぼす影響 黒田

小川真智子 基礎飼料へのムラサキ芋エキス添加がラットの粗脂肪に及ぼす影響 黒田

落合 美月 大豆皮添加飼料の摂取がMYB種肥育後期豚の肉の過酸化脂質に及ぼす影響 黒田

岸 健太 和牛にペパーミントを給与した際の牛体へのハエ飛来数に対する効果 野田

小林 千夏 飼料中エネルギー低減によるウサギの矮小発育に関する研究 黒田

小宮山ひかる 異なる茶殻の添加がラットの血中脂肪量および抗酸化値に及ぼす影響 黒田

小山 美紅 哺乳期の黒毛和種子牛へのフスマ混合ミルクの給与が血液(TP, ALB, GLU, NEFA)に及ぼす影響 池田

坂本 真紀 給与リン酸カルシウムの種類の違いが採卵鶏のミネラル吸収に及ぼす効果 池田

佐藤 秀樹 ブロイラーの乾物消化率に対するブドウ種実のグリットとしての効果 池田

嶋崎郁菜穂 給与リン酸カルシウムの種類の違いが採卵鶏の産卵成績に及ぼす影響 池田

情野 幸衛 大豆皮添加飼料を摂取したMYB種肥育後期豚の排泄物から揮散するアンモニアガス濃度に関する研究 池田

高橋 未悠 木曾馬に運動させたときの糞中VFA値変動 野田

田中 恵太 セイヨウトウキ(Angelica archangelica)の飼料原料として活用方法の模索 池田

玉川伊代菜 牛糞と笹粉末の混合がアンモニア揮散量に及ぼす影響 池田

豊田めぐみ	高タンパク質飼料の給与が食糞行動を阻止したラットの成長に及ぼす影響	黒田
長沼 真由	大豆皮添加飼料がMYB種肥育後期豚の消化、成長に及ぼす影響	池田
野中 大輔	肉用鶏発育初期の乾姜給与効果について	黒田
萩原 千晴	平成26年における黒毛和牛取引価格の枝肉等級と重量の関係	池田
原田 愛	セイヨウトウキ (Angelica archangelica) の日本での栽培の可能性について	黒田
福王寺嶺平	哺乳期の黒毛和種子牛へのフスマ混合ミルクの給与が血液 (AST, GGT, TC, TG, HDL) に及ぼす影響	黒田
福留 弘子	笹粉末を給与した牛の排泄物に由来するアンモニア揮散量	池田
松本 千恵	中雛期から給与したリン酸カルシウムの種類の違いが採卵鶏の産卵成績に及ぼす影響	池田

畜産物利用学研究室

本研究室は、室長の鈴木敏郎教授、多田耕太郎教授、入澤友啓助教授、小泉亮輔助手のご指導のもと、大学院生3名、4年次生32名、3年次生35名、総勢74名で構成されており、先進的な加工・分析技術を用い、新しい畜産食品の研究開発に取り組んでいます。

具体的には、乳・肉・卵に含まれる各種成分の化学・物理的特性ならびに栄養・生理的機能特性を品種、個体、分子レベルで研究しています。また、先進的な食品加工技術である超高压処理を用いた新しい畜産食品の研究開発、未利用状態にある畜産副産物(内臓、骨、皮等)を食料資源として活用する研究を行っています。研究成果は、食品の機能性や保存性の向上、製品加工工程の改善及び新しい加工食品の開発に利用されています。

研究活動では、3年次にハム・ベーコンをはじめとする各種畜産食品の製造実習、また食品の分析や生菌検査等から実験手順や操作方法を学び、4年次の卒業論文実習に活かして、より正確性の高い研究を重ねていきます。年間を通しては、新入生歓迎会、総会、納会、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会等を行い、お互いの絆を深めつつ、研究室の更なる発展を目指して活動しています。

安田 和晃	大豆皮添加飼料がMYB種肥育後期豚の血中の抗酸化値、酸化度、コレステロール値に及ぼす影響	池田
山本 智加	哺乳期の黒毛和種子牛へのフスマ混合ミルクの給与が発育に及ぼす影響	黒田
米満香太郎	小麦を原料とした飼料におけるニホンジカの味覚嗜好性	池田
伊良波充基	ヤギ肉臭気改善への試み	黒田
戸川 周平	トウモロコシを原料とした飼料におけるニホンジカの味覚嗜好性	池田
富岡 沙耶	異なる茶殻の添加がラット血中脂質に及ぼす影響	池田

氏名 卒業論文題目

指導員

工藤愛祐美	GABA生成乳酸菌を用いた高粘度ヨーグルトの開発	鈴木
本間小百合	須藤あかり 超高压処理と水晒しを併用した豚心臓平田 超士 ソーセイジの製造に関する研究	鈴木
水野 春加	超高压処理を用いたソーセイジ状食品に関する研究	鈴木
西村 優帆	吹春 峻聡 酵母菌体の畜肉加工品への添加利用に関する研究	鈴木
福富 義人	小林 良子 糸状菌を用いた発酵肉の製造に関する研究	鈴木
松内 絵梨	吉川 愛美	鈴木
吉谷 恵	大野 綾香 豚皮を用いた発酵食品の製造に関する研究	鈴木
茂田井瑞生	岡崎 楓 原料乳の差異がカマンベールチーズの品質に与える影響	鈴木
拓馬	小笠原望都 豚内臓を用いた発酵食品の製造に関する研究	鈴木
久波 美晴		多田

粕谷 昌輝 GABA生成乳酸菌を用いた発酵
山野 律夢 レバーの製造に関する研究

家畜衛生学研究室

加藤 彩帆 雪室貯蔵による畜肉のドライエイジング
濱野 梢 に関する研究

青島 美緒 発酵卵製品の開発に関する研究

池田 歩美
荻野 未帆

稲富 友基 雪室を用いたドライエイジングが畜肉の
鈴木 健斗 微生物叢に与える影響

中澤 勇渡

薄井 信貴 GABA含有発酵バター製造に適した
吉田 光志 乳酸菌の探索に関する研究

大武 玲菜 超高压処理を用いた減塩畜肉製品の開発
山田 純平 に関する研究

家畜衛生学研究室は、村上寛史教授、鳥居恭司准教授、
小林朋子助教のご指導の下、研究生二人、四年生二十九
人、三年生三十四名で構成されています。本研究室では、
各自で希望する家畜別に牛班、豚班、鶏班、実験動物班の
四班に分かれ、動物たちの健康を維持するとともに飼育管
理を通して各動物たちへの接し方、育て方を日々学んでい
ます。

調査研究としては、「農場から食卓まで」に関わる家畜
衛生及び食品衛生を対象に腸管内細菌の生体内移行による
臓器汚染、農場における牛白血病の感染要因や遺伝子解析、
カビの汚染や発育、農場でのオゾンナノバブル水の及ぼす
効果、ヨーネ菌死菌を用いたアレルギーモデルマウスの作
製などを研究生、学部生と共に進めています。また収穫祭
の文展では市販の肉を用いたサルモネラの分離実験を行
いました。

主な行事として、月二回の定例会、新入生歓迎会、収穫
祭、研修旅行、年末には餅つき、慰霊祭があります。これ
らの行事を通して各員は団結を深め、個々が目的を持って
有意義な研究室活動を行っています。
なお、平成二十七年年度の卒業論文の題目は次の通りです。

氏名 卒業論文題目 指導
教員

鈴木 和也 ブロイラー農場における *Salmonella*
Agona の感染状況 鳥居
村上

市川 真輝 食鳥処理場搬入ブロイラー盲腸における
カンピロバクター汚染状況

鈴木 賢人 オゾンナノバブル水噴霧が豚舎内浮遊細菌
に及ぼす影響 野口
村上

岡崎 慎 食鳥処理搬入ブロイラー盲腸における
サルモネラ汚染状況

鈴木 優香 市販鶏挽肉および生臓器を用いたサルモネラ
汚染実態調査 鳥居
村上

梶本祐希子 ヨーネ死菌を用いたアレルギーモデル
マウスの作製

関川由里子 豚分離放線菌の菌種同定 村上
小林

木次日向子 漬物における真菌汚染実態の調査と研究

高橋 昌久 オゾンナノバブル水噴霧による豚舎内の
消臭効果 野口
村上

木村 浩紀 *Campylobacter jejuni* ニワトリ盲腸定着株
投与ブロイラーにおける盲腸内細菌叢

長嶺 典子 カビの光特性と発育酸素濃度に関する
研究 村上
高鳥

下山美七海 繊維とカビの吸着と離脱の研究

中村 瞳子 一食鶏処理場契約17肉用鶏飼養農場の
衛生とその意識調査 村上
小林

新保 萌 牛白血病発症牛におけるプロウイルスの
配列多様性解析

西井 孝光 神奈川県のA農場に蔓延している牛白血病
ウイルスの遺伝子型解析 村上
小林

杉浦 香織 ヨーネ菌死菌を用いた多発性硬化症モデル
マウスの作製

野口 華奈 牛白血病発症牛におけるプロウイルスの
配列解析方法の確立 村上
小林

蓮沼 愛弓	カンピロバクター非感染ブロイラーにおける盲腸内細菌叢	村上 小林
堀内 宏樹	神奈川県A市におけるBLV感染要因の究明	村上 小林
増田 卓	農場内における牛白血病ウイルス感染ネットワーク解析	村上 小林
間瀬梨夏子	ヨーネ菌死菌を用いたクロン病モデルマウスの作製	村上 小林
矢部 康佑	豚房床面へのオゾンナノバブル水散水による殺菌効果	村上 野口
山口里沙子	Campylobacter jejuniニワトリ盲腸定着株投与におけるブロイラー盲腸粘膜の変化	村上 小林
山田 亮太	神奈川県A市におけるウシ白血病浸潤調査	村上 小林
山中 晴夏	ブロイラーの脾臓由来Salmonella Infantisの過酸化水素耐性試験	村上 小林
山谷 郁子	Campylobacter 汚染農場導入ブロイラーの別環境飼育による盲腸内細菌叢	村上 小林

横田 亜美	ブロイラーの盲腸由来Salmonella Infantisの過酸化水素耐性試験	村上 小林
渡部 真理	豚および馬から分離された放線菌の遺伝学的疫学解析	村上 小林
綿貫 園子	ダイレクトPCR法を用いた全血からの牛白血病ウイルス(BLV)検出方法の検討	村上 小林

畜産マネジメント研究室

畜産マネジメント研究室は谷口信和教授と信岡誠治准教授の指導のもと、平成二十七年度は四年生二十名、三年生二十二名、計四十二名の態勢で研究室活動を行っています。畜産の経営・経済や流通問題を軸として、生産・流通・販売・消費などの一連の過程と関連付けながらこれらの問題に対する解決策を見出すべく活動しています。また、畜産農家の後継者が多いことから、後継者の養成にも取り組んでいます。

恒例の研修旅行は、九月下旬に福島県西郷村の独立行政法人・家畜改良センターを訪ね芝原分場の子牛哺乳ロボットや肥育施設などの現地研修を行い、本所では同センターの業務内容などの研修を行いました。翌日は茨城県常陸大宮市の瑞穂農場を訪れ、日本でも最大規模のロータリーパーラーによる酪農施設と肉牛の哺育・育成・肥育農場を見学しました。同農場の瑞穂牛のパーベキューを賞味し、同農場グループの経営内容と今後の展開の方向についてヒアリングし、コスト高騰に対応した飼料用米や稲WCSなど自給飼料生産への取り組みについて学びました。

卒論研究では、東京農大伊勢原農場棚沢圃場において二十アールの水田で飼料用米の栽培試験を行っています。また、東京農大の東日本支援プロジェクト研究に参画し福島県相馬市玉野地区の三戸の酪農家の牧草地で放射性セシウム除染対策に取り組んでいます。さらに、飼料用米の新たな利用法として粳米を超微粉細し、米ゲルを製造し新食品素材の開発や利用法の開発に取り組んでいます。平成二十七年年度の卒業論文題目は次のとおりです。

氏名 卒業論文題目 指導員

石川 大輔	飼料米(粳米)を利用した米ゲル開発と加工食品の開発	信岡 谷口
宇都 貴弘	牧草の放射性Cs低減法の開発と畜産物の除染対策「ゼオライト給与による生乳の除染対策の検討」	信岡 谷口
大矢 遼介	国産豚肉におけるブランド化戦略の展開と生産拡大	信岡 谷口
小川 妙	粳米給与がブロイラーの行動・生理及ぼす影響「官能試験を中心として」	信岡 谷口
金子 伸	水田転作立脚型酪農経営の規模拡大の可能性	信岡 谷口
久間倉未奈	豚への粉碎粳米の給与効果について「離乳期からの給与による増体成績と経済性比較」	信岡 谷口
栗林 明生	飼料用米流通コストの現状とコスト削減方策	信岡 谷口
庄村 拓摩	牧草の放射性Cs低減法の開発と畜産物の除染対策「牧草の除染対策の検討」	信岡 谷口

杉浦 大喜 牧草の放射性Cs低減法の開発と畜産物の除染対策・牧草地(土壌)の除染対策の検討 谷口

高梨 彩華 親雌利用の実態と活用法の事例分析 信岡

武田 昌之 豚への粉碎粉米の給与効果について
 ー離乳期からの給与による肉質成績と経済性比較ー 信岡

辻丸 愛 粉米給与がブロイラーの行動・生理に及ぼす影響・動物福祉改善の生理的要因の探査 信岡

中里 健人 農産物直売所の今後の動向を考える
 ー大規模直売所停滞説の再検討ー 信岡

中村 早織 粉米給与がブロイラーの行動・生理に及ぼす影響・肉質への影響探査 信岡

七木田力也 生協産直銘柄豚の供給量確保に向けた家族一貫経営の規模拡大の可能性・全国先進一貫経営との比較を通して 信岡

ネルソン梨沙 若者の牛乳・乳製品消費の構造変化
 ー世帯形態と食生活からの接近ー 信岡

花瀬加奈映 粉米給与がブロイラーの行動・生理に及ぼす影響・動物福祉改善の行動的要因の探査 信岡

荻毛 敏雄 黒毛和牛への飼料米給与による肉質への影響 信岡

安田 佑輔 北海道における素牛農家の現状と将来性
 ーY牧場と中央畜産会のデータを比較してー 信岡

ふじみの寄稿原稿(教員)

32年間の農大教員生活を振り返って

畜産物利用学研究室
 鈴木 敏 郎

私が畜産学科を卒業したのは、今から40年前の1975年です。当時の畜産物利用学研究室は肉利用と乳利用の2研究室に分かれていて、私は肉研に所属していました。教員構成は鬼原新之丞教授と松岡昭善講師のお二人で、鬼原先生は千葉県の茂原市から来られていたので、研究室にはいつも11時頃に來られていた記憶があります。お二人の先生には大変お世話になりましたが、特に鬼原先生から大学院進学を勧められたことが私の人生の第一のターニングポイントになったと思います。

当時の畜産学科にはまだ大学院がなかったため、農芸化学専攻の大学院に進学することにしました。しかし農芸化学専攻の試験科目は畜産学科ではほとんど学んでいない、有機化学、無機化学、生化学、農産製造学と英語であったため、担当科目の先生にお願いして、授業を聴講させていただき、空いている時間はほとんど図書館にこもって試験勉強をしていました。このときが、人生で最も真剣に勉強をしたと思います。とにかく無我夢中で勉強した結果、なんとか合格することが出来ました。化学の大学院で所属したのは農産製造学研究室(現・食料資源理化学研究室)で、そこで小原哲二郎先生にお会いしたのが、私の人生にとっ

て非常に幸運だったと思っています。小原先生は東京教育大(現・筑波大学)から農大に來られた先生で、日本の食品工業界の重鎮の先生でした。私はそんな大先生とはつゆ知らず、いろいろなことを先生から教わりましたが、今考えると冷や汗が出ることはかりやっていたような気がしますが、この農産製造学研究室での5年間が私の研究者としての方向性がある程度定まった時期だと思っています。小原先生以外にも鴨居郁三先生、松本信二先生からいろいろのことを教わり、同期の院生達にも恵まれ、本当に充実した大学院生活を過ごすことができました。

博士後期課程を修了して、1年間、畜産物利用学研究室に戻り副手をしましたが、なかなか就職先が見つからなかったこともあり、小原先生からオーストラリアのCSIRO食肉研究所へ留学してみないかとお話がありました。これまで一度も海外に行ったことがなく、なかなか踏み切りが付かない自分に、「鈴木君、チャンスはいつも転がっているものではない、チャンスが来たときにはそれにしがみついてもゲットするものだ。」とおっしゃった小原先生の言葉が、今も心に残っています。これで踏み切りが付いた私は、1981年の4月にオーストラリアのプリズベンでの2年間の留学に旅立ちました。これが私の人生の第二のターニングポイントでした。

CSIROへの留学は今とは違い、インターネットもなく、やっとファックスが始めた頃で、国際電話料金も非常に高いために、緊急の場合以外は手紙を書いて日本と連絡を取っていました。食肉研究所には日本人は私一人だったため、日本人との関わりはほとんど無く、その分現地の人たちとの交流が密になったのは、今考えると非常に幸運だったと思っています。当時の研究所の同僚達とは今

でも国際学会や彼らが日本に来たときに会って交流が続いています。また、食肉研究所で、私のライフワークの研究となった超高压処理の研究に巡り会ったことは、私の研究者としての人生にとって非常に大きかったと思っています。2年の留学生生活が終わりに近づいたとき、大手の食品会社の研究所に就職がほぼ決まっていたのですが、幸運にも農大に戻って来ないかとのオファーがありました。このときにも先ほどの小原先生の言葉を思い出し、農大に奉職することを自ら決定しました。農大では総合農産加工実習所（現・食品加工技術センター）で畜産加工だけでなく、食品加工全般について講義及び実習を行ってきました。

私の人生の第三のターニングポイントは、2007年4月から畜産学科に異動になったことだと思います。通常、大学教員は同じ大学では学科をまたいで異動することはほとんどありませんが、私の場合、畜産物利用学研究室の松岡先生、古川先生、渡部先生が、同時に退職なされることもあり、ご退職1年前に古巣である畜産物利用学研究室に戻ることにしました。食品加工技術センターは学部の付属機関であり、学科と違い配属される学生も4、5人と少なかったのですが、畜産学科に戻ってきて3、4年生合わせて70名以上の大所帯に大変驚きました。もちろん色々大変なことも有りましたが、加工センターでは絶対に味わえないことを、室員の学生諸君と共に共有できたことは、本当に素晴らしい経験でした。

もし、この畜産学科の9年間が無かったら、私の農大における教員生活はこれほどまでに充実していなかったと思います。これもひとえに、私の畜産学科への異動を快く承諾してくれた畜産学科の先生方と、私に付き合ってくれた学生諸君に心より感謝したいと思います。今は「終わりのよ

ければ全てよし」という心境です。本当に長い間有り難うございました。

畜産学科の一員になって

畜産物利用学研究室

入澤 友啓

新入生の皆様、同窓会の皆様、初めまして。平成27年4月より畜産物利用学研究室でお世話になっております。「ふじみの」の執筆を依頼され、もう一年が経過しようとしているということに気付かされ、只々、時の流れの速さに驚いております。この一年を振り返ると、無我夢中でいろいろなことに取り組んでいた日々でした。

今回が、皆様への初めてのご挨拶ということ、この場をお借りして、少し、私の紹介をさせていただきます。

私は、厚木キャンパスからほど近い、寒川という土地で生まれ、育ちました。平成12年4月に東京農業大学応用生物科学部醸造科学科に入学し、卒業後も博士前期課程・後期課程ともに東京農業大学で研究を行っていました。学部4年生では酢酸菌の酢酸耐性遺伝子に関する研究を行い、大学院では5年間、難養乳酸菌の分離方法の確立に関する研究を行っていました。この5年間はひたすら大学で研究の毎日でした。大学院生として過ごした5年間は研究に對す考え（研究に對する哲学）を形成するうえで非常に重要な期間となりました。恩師である岡田早苗先生と度々、お酒を酌み交わしながら話をすることで、様々な考え方を持つようになりました。また、多くの良き先輩・同輩・後輩に恵まれ、充実した日々を過ごすことができました。学位を取得後は東京農業大学応用生物科学部 生物応用化学科の助手として食品科学の分野の研究生とともに進めています。着任以前から大学での教育・研究に對しては興味を抱いていましたが、助手として勤務していたこの

期間にその気持ちはさらに強いものとなり、この期間が私にとって大きなターニングポイントとなったと感じています。この頃から、将来は大学で教育・研究に携わる職業に就くことを強く希望するようになりました。それは、学生とともに研究室で生活をする中で成長していく様子を目の当たりにすることや研究で成果を出した際に共に感動を共有できる部分に大きな魅力を感じたからです。その気持ちをもちながらも、通算11年半を過ごした大学を一度、離れた。平成23年9月から3年半の間、理化学研究所にて、日本とインドネシアの共同プロジェクトに参加し、ポストドク（特別研究員）として研究を行いました。研究の内容はインドネシアに国際基準の微生物保存機関を立ち上げることで、そしてその機関に寄託する菌株として、インドネシアの鶏（主にブロイラー）や牛のプロバイオティクスに応用可能な微生物を分離することを目的とした研究をしていました。インドネシアに渡航し、1ヶ月現地にて研究を行うこともしばしばありました。海外の研究者と文化や習慣をとりながら研究を進めることは、当初、色々苦勞することが多かったものの最終的にはともに研究をすすめる、成果を積み上げていく喜びというものがちかちかしながら研究を遂行することができました。また、長期の滞在時には研究の合間にインドネシア語を覚えて、レストラン等で実際に使ってみるなど、研究以外の面でも印象深い経験ができました。このような経験を通して、教員としても研究者としてもまだまだ半人前の私ですが、現在の自分を形成してきました。一年が経過した現在、東京農業大学のような恵まれた環境で教育・研究が行えることはとても幸せなことである反面、大きな責任を感じています。初心を忘れることなく、微力ながらも学生を成長させるための手助けを試行錯誤しながらも全力で取り組んでいきたいと考えております。そ

の中で私自身も学生とともに成長をしていきたいと考えております。そして将来、笑顔で大学を訪れてくれるような学生や社会で自己実現ができるような学生を数多く輩出することも今後の大きな目標の一つです。

素晴らしい環境を与えてくださった東京農業大学に少しでも貢献できるよう、日々精進していく所存です。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

東京農大の一員になって

家畜衛生学研究室

鳥居 恭司

新入生の皆様、同窓会の皆様、初めましてご挨拶をさせていただきます。平成27年4月より家畜衛生学研究室でお世話になっております。どうぞよろしく願いいたします。

この場をお借りしまして、自己紹介をさせていただきます。

私の生まれは東京ですが、幼稚園から高校までは現在勤務しています厚木キャンパスからほど近い、神奈川県相模原市で過ごしました。子供の頃の相模原は今とは違い、畑や林だらけで外で泥まみれになりながら遊んでいた覚えがあります。

大学は、岩手県盛岡市にあります岩手大学農学部獣医学科を卒業しました。大学の2年生までは大先輩である宮沢賢治も過ごしたといわれる農学部寮に住んでいました(建物はさすがに作り直してしまいました)。農学部の寮ということもあり、自分の所属以外の農学・林学・農業土木・農業経済などの先輩方とも交流があり、時には夜中まで日本の農業について語り合ったこともありました(先輩につきあわされたのですが)。今となっては良い思い出になっています。研究室を決める際には現在のように成績順ではなく、希望者によるジャンケンで決めることとなり、私はことごとく負け続けて家畜生理学教室で研究を行うことになりました。そこで出会った細菌毒素の研究を現在まで継続して行うことになるのは、その当時は全く考えなかったものです。卒業論文の研究テーマは、毒素を利用して神経細胞内に効率よく物質を送達する分子を作製するという内容で行いました。分子の作製は化学的に行ったためかなり

時間がかかり、苦勞をしつつ何とか仕上げた覚えがあります。

大学卒業後は学生時代の想像とは異なり、様々なところで仕事を行うことになりました。公務員として治療用抗毒素製剤の製造および毒素製剤の開発を行っていた際には、ウマの飼育・治療も出来つつ(抗毒素製剤はウマの免疫グロブリンを精製して製剤化します)、薬の製造・開発を出来るなんて天職と思っていたところ、所属研究所が閉鎖になるという憂き目に遭いました。その後、公務員時代に開発中であつた毒素製剤と一緒に製薬会社を渡り歩きました。開発研究が一段落した後、共同研究先であつた大阪大学医学部でお世話になり、今回東京農大で仕事をさせていただきますことになりました。学生の時には全く想像していなかった職歴になりましたが、学生時代に出会った研究テーマを未だに行っていることは周りの方々のご指導のおかげと思ひ、大変感謝しております。

東京農大は亡くなった祖父の出身大学でもありますので、こちらで仕事をさせていただくことは何かのご縁があつたものと思っております。この縁を大切に皆様のご指導を受けつつ頑張っていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

東京農業大学の教員となつて

家畜衛生学研究室

小 林 朋 子

私は、2014年より農学部家畜衛生学研究室の助教として、東京農業大学に勤務させていただいております。昨年末は第2子出産のため産休をいただいております。ご挨拶が遅くなりました。もはや新人ではありませんが、簡単に自己紹介をさせていただきます。

出身は奈良県ですが、中高6年間と予備校の2年間、大学院4年間とポスドク2年間は京都に通っていました。奈良に住んでいながら、京都で過ごした時間の方が長い気がします。今でも関西出身の方と話しているとたまに関西弁が出てしまいます。

大学は北海道の酪農学園大学に行っておりまして。もともと動物が好きで、獣医になれば動物と触れ合えると思ひ獣医学部に進学しました。しかし、実際に授業で学ぶのは病気の動物や死んだ動物に関することばかりで、実際に健康な動物と触れ合うことはあまりありませんでした。そんな時にちょうど高病原性鳥インフルエンザウイルスの流行や、東南アジアにおける豚のニパウイルス感染症の流行などがあり、野生動物から家畜に感染する病原体の制御に、獣医師として関わる方法があることを知り大変魅力を感じました。北海道の大自然は好きだったので、大学卒業後は病原体、特にウイルスについて学びたいと思ひ、京都大学医学研究科のHIVを研究している研究室に所属しました。宿主に寄生しなければ生きていけない病原体にとって、宿主を殺してしまうような激的な症状を引き起こすことはデメリットであると考えられます。とすると、宿

す。まだまだ教員としても研究者としても駆け出しで未熟な面があるかと思いますが、少しでも農大に貢献できるように、これまでの様々な経験を活かして精一杯頑張りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

主に自身の遺伝子を組み込んで共存するHIVのようなレトロウイルスは、どのような分子機構で持続的な感染を維持しているのか、ということに興味を持ったからです。しかし、私の学部の卒論内容は寄生虫の疫学調査で、PCRもかけたことがないまま進学してしまい、はじめは研究室で話されている内容がほとんど分からず苦労しました。最終的にはこの研究室のテーマのなかにひとつ、HIVがサルからヒトへと適応進化していった過程を分子生物学的に解明する、という私の興味に合致するものがあり、その研究の一端を担うことにより学位を取ることができました。

学位取得後はポスドクとして動物衛生研究所に勤務しました。といっても、勤務先はつくばではなく、タイ王国のマヒドン大学獣医学部に派遣されて高病原性鳥インフルエンザの研究を行いました。ちょうど派遣された年は、派遣先の大学が実験室の改修工事をするために半年ほどほとんど実験ができなかったり、洪水でバンコク市内が水浸しになったりと様々なトラブルがあり、海外で研究する難しさを実感しました。仕事はあまり進みませんでした。現地のタイ人のスタッフの方々には大変良くしていただき、大変楽しい海外生活を送ることができました。

その後帰国し、大学院でお世話になった研究室でポスドクとして再度HIVの研究に従事した後、現在に至ります。現在は、近年日本において問題になっている牛のウイルス感染症である、牛白血病の調査研究を行っています。厚木キャンパスには、学部生の時に一度学会で訪れたことがあり、雰囲気がよく気に入ったのを覚えています。まさか10年後に勤務することになるとは思っていませんでしたが、不思議な縁を感じます。毎日大山を見ながら出勤し、構内の野鳥の声を聞きながら学食に行き、動物を見たくなったらいつでも見ることが出来る環境がとても好きで

人の輪に感謝

畜産学科

4年 玉川 伊代菜

この4年間を振り返ると、とても楽しくて人に恵まれた4年間だったなあとと思う。高知県の人里離れた山奥から出てきて、知らないことばかり、不安しかなかった1年生。同じ高校出身の友人たちと3人でそわそわしながら、入学式に向かったのを覚えている。電車、大きいビル、人、人。絶対友達出来ない、当時はそう思っていた。でもそんな不安も束の間、気付いた時には私の周りには個性豊かな仲間達であふれていた。そうすると、毎日学校に行くのがワクワクで毎週ある共通演習、化学実験が楽しみで仕方がなかった。そんな私には、楽しみがもう一つ。サークル活動である。中学からバレーボールを続けていた私は迷わず「バレー天」に入った。練習に行ってみて、まず思ったことはとにかくみんなうまい！！正直行くまではサークルだし適当な感じなんだろうなと思っていたのだが練習を通して個人のレベルの高さに驚いた。そんな先輩方とバレーを出来るのはとても楽しかったし、刺激になった。また、サークルは他学年、他学科と仲良くなるきっかけにもなったし、今となっては、私にとってのもう一つのホームのようななか

いつかのために、今しかできない、農大生。

畜産学科

3年 大澤 将弥

農大が大好きだ。

私は農大に入学して初めて農業に触れた。そして農業の虜になった。今は具体的に何か詳しい訳ではないが、将来も農業に携わると決めている。1年次からファーム同好会に所属しており、今でも農家さんにお世話になっている。並行して1年次から日本全国で一人旅をしてきた。今では趣味であるが、「全国の農業を知りたい」という目的で始めた。

周知の通り、全国各地で農大OBの方々が農業で活躍されている。そういった方々とお会いして話す機会があった。リアルタイムな話をすることができた。ところが私の勉強不足は顕著に露呈する。

例えば鹿児島での話をしよう。指宿市の豆農家さんは私に言った、「大学にいる間に経営を勉強しとけ」と。経営なんて一切気にも留めていなかった。また和牛肥育農家さんを訪れた際は、A5ランクの肉がどのように生産されているか知らなかった私は、手も足も出なかった。

恥ずかしく、未熟さを痛感した。叱られもした。でもそれ以上に可愛がってもらえた。どこもかしこも、私が、農大生だから受け入れてくださったのだ。OBの方と繋がること

がえない存在である。毎年サークルのメンバーで大会に出られたこと、日々の練習、夏合宿や冬合宿はどれも楽しくて、一生の思い出となった。

3年生になり研究室が始まった。私は、家畜飼養学研究室に入った。研究室に入ると実験なども始まり、授業も減ったのでそれまで毎日のように会えていた友人達とも会える機会が一気に減った。逆にその分研究室が一緒になった友人達と過ごすことが多くなった。一般成分分析の実験が始まると更に生活が一変。特に忙しい時には朝から晩まで実験をしていた。実験が得意じゃなかった私がそれを乗り越えられたのも友人達、先輩方のサポートのおかげである。4年生には、卒業論文が始まり、ウシの排泄物から発生するアンモニアガスの実験をしていた私は同じ項目の友人とウシのお尻の前でひたすら排泄物が出るまで待機したりしていた。その時は過酷で、ウシのお尻に向かって愚痴ばかりこぼしていたが今となってはいい思い出である。

この原稿を依頼された今、1年生からこれまでの学生生活を改めて振り返ってみて、自分はたくさんの人に支えられてここまでやってこれたんだなと実感した。良き教授、友人、先輩、後輩達に出会えて、よかった！この学校に来てよかった！みなさん楽しい思い出をありがとうございます。

ができた。こんな恵まれた環境が他にあるだろうか！

そして何より、外に出なければ絶対出会わなかった。起ころなかった。大学へ通う日々に戻った時、またしっかりと学ぼうと思え、自分を知ることができたのだ。そう、

「農大生」を振りかざして飛び出せるのは今だけだ！」

農大キャンパス内で終わる学生生活じゃない。農大は自分の強みにするものであって、学生生活は外の世界にこそある。私はそう信じている。学生生活とは「学生という立場を利用してしなければできないことを、とにかく沢山実行する」機会だと考える。とすれば、そういった機会は農大より外の方が断然多いと、自ずと分かる。日本の国土に占める厚木キャンパスの大きさを見れば一目瞭然だ。日本全土が学び舎。外に出る素晴らしさを少しはお伝えできただろうか。

では例えば、実習が少ないと不満な方は実習を求めて外で行動しただろうか？1年次から牧場でも養豚場でも養鶏場でも実習へ行くことは可能だ！

私は今、厚木キャンパス内で、学生主体でもっと農業全体を体感できる交流会があればいいと考えている。農業で生きていくなら、多量な情報をいかに共有、利用できるかが鍵である。だから学生の内に学生同士の横の繋がりを作り、OBとの縦の繋がりを作りたい。そして、あらゆる生きた情報を、特別な体験を、思いのたけを将来のために共有したい。これまでの体験を活かしたい。

いつか来るその日のために、今しかできないことがある。よしやるぞ。

大学生活

畜産学科

2年 石川 和子

私は幼い頃から動物が好きで、動物のことを学びたいと思いい、この学校に入学しました。入学して二年が過ぎた今、充実した学生生活を送れているのではないかなと思えます。入学した最初の頃は、講義で初めて知ることが多く、ついていくのに苦労したことを覚えていきます。しかし、初めてのことが多かったからこそ、刺激的で、充実していました。中でも、富士農場での実習は動物の体温や匂い、肌さわりなど、普段の講義だけでは学べないことも知ることができました。約一週間の実習は大変なことも多かったです、それ以上に得るものが多くありました。動物についての知識はもちろん、実際の動物の扱い方や、管理方法をこの目で見ることで、より深く学べたのではないかなと思えます。

二年生になってからは、講義の内容がより専門的になり、難しくなりました。しかし、難しくなった分、一年生の時よりもやりがいを感じるようになりました。一年生の時よりも動物のことを深く学ぶことが出来るようになってきました。難しい課題に取り組んでいくなかで、自分のやりたいうことや興味のあることが段々と見えてくるようになって

きました。三年生からの研究室活動に反映できたらなと思っています。

大学では、勉強だけでなく、いろんな人と出会うことができました。私が出会った人達は皆個性的で、私が今まで出会ったことのないような人ばかりでした。私がこの二年間の学生生活が充実できたのは、この友人達のおかげだと思っています。私は今まで実家が農家の人や、農業高校の人たちと知りあう機会がなかったので、その友人達の話はとても興味深いものでした。相談にのってもらったり、遊んだり、友人達には本当に支えてもらった二年間でした。もう大学生活も折り返し地点になります。この二年間は本当に一瞬で過ぎたように感じます。しかし、とても濃い二年間でした。動物のこと等の知識を深めたばかりでなく、人間としても成長出来た二年間だったのでないかなと思えます。来年から三年生になり、研究室に所属することになります。研究室での活動がどの様なものになるのか、不安でいっぱいですが、どんなことが学べるのか楽しみでもあります。また、どんな人に出会うことができるのか今からとても楽しみです。学生生活があと二年間と残り少なくなってしまうと思いますが、この二年間も充実したものになるようにしていきたいと思っています。

重厚な大学生生活

畜産学科

1年 石見 菜奈

入学式、新たに始まる大学生活への期待と、一方でまともな生活を送っていけないかという不安を感じていました。私は、恥ずかしがり屋なため、中々自分から人に話しかけることができませんでしたが、入学した後に行われたオリエンテーションで、多くの友達をつくることができ、これからの生活にさらに期待が膨らみました。

講義が開始されると、私が知っていた事を知識として吸収することができ、充実感を得ることができましたが、その分、レポート課題の量も多かったので、毎日のように学術情報センターに通い、課題に取り組んでいました。それにより、講義を通して学んだ畜産の専門的な知識を深めることができました。

七月、大学に進学して初めて行われた定期試験。専門性の高い大学での定期試験となると、緊張感と不安感でいっぱいでしたが、なんとかその気持ちと戦いながらも、勉強に励み、試験を受けましたが、結果が努力についてきたので、達成感を感じられたのと同時に自信ができました。

定期試験直後に実施された畜産実習。私が去年練習生の際に生まれた双子の子牛は、通常の和牛の出生体重三十キ

ログラムであるのに対し、二十五キロログラムと十七キロログラムであったため、生きていくか心配していましたが、二頭共小さいながらも飼料を積極的に食べていて涙が出そうなくらい感慨深い思いをしました。

秋には収穫祭が開催されました。今年からはスタッフとして支える立場となりました。私は和太鼓同好会に属しているため、収穫祭の発表に向け、練習に力を注いでいました。初めは、リズムを覚えることで精一杯でした。そんな中、叩くパートの変更をすることになり、一時期は周りの足を引っぱり、罪悪感を感じ辞めたいと思っていました。それでも、練習にかじりつき、先輩に褒められるまで上達しました。そして、発表本番では、大きなミスをすることなく、無事終えることができました。

今こうして、先輩、特に二年生が中心となって農大を支えています。来年には自分達一年生がメインで農大を盛り上げていく立場となりました。まだ、引張つていくことへ不安はありますが、積極的に活動に参加し、さらに充実した大学生活を送りたいです。

平成 26 年度 畜友会 収支決算報告

収支決算書 平成 26 年 6 月 1 日～平成 27 年度 5 月 31 日

I. 一般会計

収入の部

(単位:円)

科 目	決 算 額	予 算 額	差 異	備 考	
会 費	新入生 (H26 年)	1,330,000	2,160,000	830,000	新入生: 10,000 円×133 名
	編入生 (H26 年)	10,000	15,000	5,000	編入生: 5000 円×1 名…①
	過年度分	310,000	2,067,500	1,757,500	在学生: 10,000 円×31 名
普通預金利息	451	300	△151		
前年度一般会計繰越金	3,869,710	3,869,710	0		
収穫祭特別会計からの繰入金	463,335	0	△463,335	収穫祭特別会計収支差額	
合 計 (A)	5,983,496	8,112,510	2,129,014		

①編入生 1 名が 5000 円多く振り込んでしまったため

支出の部

(単位:円)

科 目	決 算 額	予 算 額	差 異	備 考
収穫祭特別会計費	693,000	693,000	0	
ふじみの印刷費	286,200	300,000	13,800	
卒業祝賀会費	162,294	180,000	17,706	
卒業記念品費	227,750	230,000	2,250	
新入生歓迎会費	45,000	150,000	105,000	②
消耗品費	0	30,000	30,000	
特別講演会費	0	0	0	
備品	0	50,000	50,000	
雑費	14,169	30,000	15,831	振込手数料
予備費	0	6,449,510	6,449,510	
合 計 (B)	1,428,413	8,112,510	6,684,097	
収支差額: (A) - (B)	4,555,083	0	△4,555,083	次年度繰越金

②の差異は歓迎会の料理代が畜友会費から支出されなかったため

平成 27 年度畜友会活動報告

平成 27 年 6 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

畜友会だより

平成 27 年

- 6 月 24 日 平成 27 年度畜友会定期総会
平成 27 年度畜友会・畜産学科収穫祭実行委員会
(統一本部) の立ち上げ
(於 第一講義棟 1102 教室)
- 10 月 1 日 第 16 回厚木キャンパス収穫祭 及び
第 124 回体育祭厚木団結式 出席
(於 レストランけやき)
- 10 月 10 日 厚木パレード 参加 (於 厚木一番街)
- 10 月 12 日 第 16 回厚木キャンパス収穫祭 及び
第 124 回体育祭畜産学科統一本部本部開き
(於 レストランけやき)
- 10 月 30 日 第 16 回厚木キャンパス収穫祭 前夜祭 参加
- 10 月 31 日 第 16 回厚木キャンパス収穫祭 参加
～ 11 月 1 日 (家畜苑、研究棟アート、神輿展示、特別企画、宣伝隊)
- 11 月 3 日 第 124 回体育祭 参加 (於 世田谷キャンパス)
- 11 月 23 日 第 16 回厚木キャンパス収穫祭 及び
第 124 回体育祭畜産学科統一本部本部閉め
(於 レストランけやき)
- 12 月 2 日 第 16 回厚木キャンパス収穫祭 及び
第 124 回体育祭厚木慰労会 出席
(於 レストランけやき)

平成 28 年度

- 3 月 20 日 畜友会誌「ふじみの」52 号発行
- 3 月 21 日 平成 27 年度 卒業祝賀会・卒業記念品贈呈
(於 厚木キャンパス)

平成 27 年度 畜友会予算
(平成 27 年 6 月 1 日 ~ 平成 28 年 5 月 31 日)

I. 一般会計予算

収入の部 (単位: 円)

科 目	当年度	前年度	差 異	備 考
会 費				
新 入 生 (H28 年)	2,070,000	2,160,000	△ 90,000	①
編 入 生 (H28 年)	15,000	15,000	0	②
過年度分	1,910,000	2,067,500	△ 157,500	③
雑 収 入	300	300	0	④
前年度繰越金	4,555,083	3,869,710	685,373	
合 計	8,550,383	8,112,510	437,873	

- ① 新入生: 10,000 円 × 207 名
 ② 編入生: 5,000 円 × 3 名
 ③ 過年度分: 10,000 円 × 189 名 + 5,000 円 × 4 名
 ④ 預金利息を含む

支出の部 (単位: 円)

科 目	当年度	前年度	差 異	備 考
収穫祭特別会計費	693,000	693,000	0	
ふじみの印刷費	300,000	300,000	0	
卒業祝賀会費	180,000	180,000	0	
卒業記念品費	212,000	230,000	△ 18,000	⑤
新入生歓迎会費	150,000	150,000	0	
消耗品費	30,000	30,000	0	
特別講演会費	0	0	0	
備 品	50,000	50,000	0	
雑 費	30,000	30,000	0	
予 備 費	6,905,383	6,449,510	455,873	
合 計	8,550,383	8,112,510	437,873	

⑤ 4 年生 212 名 × 1,000

平成 26 年度 収穫祭特別会計収支決算報告
(平成 26 年 6 月 1 日 ~ 平成 27 年 5 月 31 日)

II. 収穫祭特別会計

収入の部 (単位: 円)

科 目	決 算 額	予 算 額	差 額	備 考
一般会計からの繰入金	693,000	693,000	0	
普通預金利息	77	0	△ 77	
合 計 (C)	693,077	693,000	△ 77	

支出の部 (単位: 円)

科 目	決 算 額	予 算 額	差 額	備 考
統 一 本 部	198,792	400,000	201,208	①
宣 伝 隊	0	50,000	50,000	
備 品 費	0	0	0	
特 別 企 画	0	0	0	
装 飾 費	0	50,000	50,000	
家 畜 苑	27,590	100,000	72,410	②
体 育 祭	3,360	40,000	36,640	③
雑 費	0	3,000	3,000	
予 備 費	0	50,000	50,000	
合 計 (D)	229,742	693,000	463,258	
収支差額: (C) - (D)	463,335	0	△ 463,335	

- ① 団結式、慰労会の料理代、飲料代等
 ② 家畜搬入に伴う交通費
 ③ 世田谷キャンパスでの会議における交通費

上記の通り報告する。
平成 27 年 6 月 24 日

畜友会会長 半 澤 恵 ㊟

監査報告書

畜友会会則第 9 章、29 条及び 30 条の規定に基づいて平成 27 年 6 月 11 日に平成 26 年度業務及び会計監査を実施しました。

事業報告、通帳、出納帳及び領収書を精査した結果、適切に遂行されたことを認める。

上記に相違ないことを認める。
平成 27 年 6 月 11 日

平成 27 年度畜友会監査委員

原 ひろみ ㊟
増 田 康 司 ㊟

高 橋 幸 水 ㊟
小 川 直 輝 ㊟

平成 27 年度畜友会役員

平成 27 年 6 月 1 日～平成 28 年 5 月 31 日

役職(教員)	氏 名	研 究 室
会 長	半 澤 惠	家畜生理学研究室
副 会 長	野 村 こ う	家畜育種学研究室
	多 田 耕太郎	畜産物利用学研究室

・執行委員

委員長	3 年 入 江 駿 敬	家畜飼養学研究室
副委員長	3 年 興 梶 史 也	家畜飼養学研究室
	2 年 鶴ヶ崎 世 結	未 定
庶 務	3 年 金 子 泰 昭	家畜繁殖学研究室
	2 年 松 本 奈 々	未 定
会 計	3 年 内 山 愛 里	家畜繁殖学研究室
	2 年 眞 子 由 衣	未 定
企画・渉外	3 年 永 井 明日佳	畜産マネジメント研究室
	2 年 鈴 木 飛 鳥	未 定
編 集	3 年 敷 地 生 光	家畜飼養学研究室
	2 年 外 内 万 夏	未 定
監事(教員)	原 ひろみ	家畜生理学研究室
	黒 澤 亮	家畜飼養学研究室
監事(学生)	3 年 小 川 直 輝	家畜飼養学研究室
	2 年 山 口 智 也	未 定

※学年は平成 28 年 3 月現在

特別会計予算

(平成 26 年 6 月 1 日～平成 27 年 5 月 31 日)

II. 収穫祭特別会計予算

畜友会援助費

収入の部 (単位:円)			
科 目	H27 年度	H26 年度	差 異
一般会計からの繰入金	693,000	693,000	0
合 計 (A)	693,000	693,000	0

支出の部 (単位:円)			
科 目	H27 年度	H26 年度	差 異
統 一 本 部	400,000	400,000	0
宣 伝 隊	50,000	50,000	0
特 別 企 画	0	0	0
装 飾	0	0	0
家 畜 苑	50,000	50,000	0
体 育 祭	100,000	100,000	0
口座維持費	40,000	40,000	0
雑 費	3,000	3,000	0
予 備 費	50,000	50,000	0
合 計 (B)	693,000	693,000	0
収支差額(A)-(B)	0	0	0

農友会学科助成金

収入の部 (単位:円)				
科 目	農友会厚木支部助成金			備考
	H27 年度予算額	H26 年度決算額	差 異	
畜産学科助成金	1,813,000	1,809,000	4,000	
預金利息	0	101	△101	
合 計	1,813,000	1,809,101	3,899	

支出の部 (単位:円)				
科 目	農大厚木支部助成金			備考
	H26 年度予算額	H25 年度決算額	差異 (1)	
1 事務費	15,000	12,220	2,780	
2 記録費	10,000	0	10,000	
3 公用費	4,000	4,000	0	
4 交通費	200,000	140,170	59,830	最大人数で見積もり
5 神輿費	145,000	133,655	11,345	
6 パネル費	130,000	122,189	7,811	
7 応援合戦・衣装代	230,000	223,899	6,101	
8 学内装飾費	480,000	479,864	136	
9 収穫祭体験企画費	595,000	569,344	25,656	
鋼管リース費	150,000	131,075	18,925	
運搬費	130,000	129,600	400	
装飾費	165,000	118,551	46,449	家畜苑の門を作り変えるため
活動運営費	150,000	190,118	△40,118	
10 雑 費	4,000	1,620	2,380	
合 計	1,813,000	1,686,961	126,039	

(1) H27 年度予算額-H26 年度決算額

第十六回厚木キャンパス収穫祭・第二四回体育祭事業報告及び結果報告

【事業報告】統一本部

今年度第十六回収穫祭及び第二四回体育祭畜産学科統一本部の活動は例年と同じく、収穫祭宣伝活動、神輿作成、研究棟アート、特別ステージ企画、家畜苑、櫓装飾、体育祭演舞を行いました。

統一本部（委員長、副委員長）の活動としては、先生方との連絡を取り、第十六回厚木キャンパス収穫祭実行本部及び畜産学科統一本部、農学科統一本部、バイオセラピー学科統一本部、また世田谷十四学科と連携し、第十六回厚木キャンパス収穫祭及び第二四回体育祭を成功させる為に、夏季休暇から数ヶ月をかけて全力疾走し全身全霊を捧げてきました。

畜産学科統一本部としての全体活動は、新一年生親睦会、新入生歓迎会相模川B・B・Qを開催し、一年生に宣伝が出来ました。また、今年度は人数が少なく、終夜作業も毎日行えない環境の中で全員が協力し、連絡を取り合ったお陰もあり収穫祭及び体育祭を大成功で収めることが出来ました。体育祭は雨が降ったため順延になり競技数が減りました。畜産学科ではその中でも競技を勝ち、体育祭では伝統を継承しつつ新しいことに挑戦した結果、総合優勝という輝かしい栄冠を手にすることができ、優勝旗が相模川を渡り厚木へ持って帰ることが出来ました！例年と同様に、定期総会、畜産学科統一本部開き、慰労会も行い、

特別企画

特別企画とは、収穫祭前夜祭・本祭で行われるステージ企画の作成及び運営を任されている部門です。

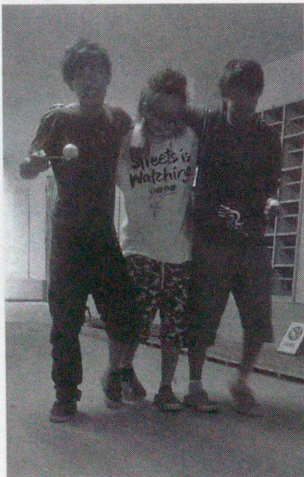
今年度の畜産学科統一本部特別企画部門が作成・運営した企画は「NBC (Nodai Beauty Contest)」「絆〜サークル王決定戦〜」の2つでした。

「NBC」とは、最も美しい男女を決めるコンテストです。この企画は例年畜産学科が本祭1日目のトリを任されており、今年度は参加者が諸事情により7人になってしまいましたが大いに盛り上がりました。もう一つの企画である「絆〜サークル王決定戦〜」は今年度初めて行われた企画です。この企画は農大にある各サークルの代表者3名が参加者となりサークルの絆を試すような競技を行う企画です。両企画とも試行錯誤しながら部門の全員が協力して本番を成功させることができました。

昨年同様ステージ企画は、体育館での開催になり他学科・総務部と協力し合いステージ企画を作ることができました。活動の中、ステージを作成・運営することの難しさに毎日パニック状態でした。ですが、本番になり自分たちの考えた企画で参加者と観客の笑顔を見て無事にステージを終えたときに喜びが抑えきれませんでした。

来年は今年の反省点を踏まえつつ、もっとたくさん観客が笑顔になれるぶっとんだ企画を作っていこうと考えております。

世田谷キャンパスと合同で全体団結式・慰労会にも参加させて頂きました。
来年度の目標は、前年度の大成功に気負うことなく畜産学科の伝統と次なる挑戦を続けた上で、第六十七代の色を収穫祭・体育祭に魅せて優勝旗は相模川を渡らせません！



宣伝隊

宣伝隊は厚木パレードの運営、市内外での祭りや小田急各駅で収穫祭宣伝のビラやうちわ配り、また農大名物である大根踊りを踊ったりして収穫祭を宣伝する部門です。活動中は東京農業大学厚木キャンパスのモチーフである大根と鮎の柄が入った白い浴衣に収穫祭の文字が背中に描かれた宣伝隊法被を着用して宣伝活動をしました。

今年は八月に行われた鮎祭りのDance Legendに参加してうちわ配りと大根踊りを披露したのを始めとして、小田急各駅でのビラ配りや厚木市、海老名市周辺のお店にビラやポスターを置かせてもらい地域の街で宣伝活動を行いました。

また十月には宣伝隊が運営を行う厚木パレードを開催しました。パレードでは神輿を担ぎ、大根踊りをして厚木市全体を盛り上げることができました。すべての活動を通してお客さんから「毎年行ってるよ」などのお声を頂き、宣伝活動を通して一番お客さんとの距離が近く温かさを感じると実感しました。

収穫祭当日では野菜無料配布を二日間計四回行いました。無料配布は毎年大反響で今年も用意した野菜をすぐに配り終えました。また昨年度から始めたビラに抽選券を付けて行っている抽選会では昨年度よりもたくさん人が来てくれて大成功でした。本祭では宣伝隊一同ビラやポスターでの宣伝効果を身をもって体感しました。

来年度は収穫祭で行われる内容を細かく見やすくビラに

神輿

今年度の神輿部門は、一目で畜産学科とわかるような神輿を作ること目標として作成しました。

活動としては、厚木の一番街で催される「厚木パレード」において神輿を担ぎ収穫祭の宣伝を行いました。本祭では前年度同様の厚木キャンパス内での一般投票が行われました。そして今年度からキャンパス内で練りも行われました。

今年は8月から作業を開始し、3年生2人2年生3人で約3か月間活動していきました。今回は遠くから見ても目立つように色彩豊かに仕上げました。そして今回は彫り物をメインに制作しました。ここでも畜産学科らしさを忘れずに彫り物では大きな牛、猪、鶏を制作しました。細かい部分でも小さい家畜を彫りました。そして、鳳は白色レグホーンとともに畜産学科らしいものを制作することができたのではないかと思います。今年は厚木キャンパスでの一般投票の結果は優秀賞を取ることができず、そして雨天の影響により体育祭当日に世田谷キャンパスに持っていくとすらできませんでした。とても悔いの残る収穫祭となつてしまいました。

来年度は、今年の畜産学科らしさを受け継ぎ更に今年よりも良い神輿を制作していきたいと思えます。厚木キャンパスでも世田谷キャンパスでも1位を必ず取りたいと思えます。来年は神輿部門も優勝して全ての部門の優勝に貢献していきたいと思えます。

記載して、毎年来ていただいている方はもちろん、新規のお客さんも「これ楽しそうだから行こうかな」と思ってくれるような宣伝活動をして農大全体を盛り上げていきたいです。



体育祭

「至急体育祭の順延について」

私たちの体育祭は学生ポーターのこの文言で始まりました。きつとあの瞬間は体育祭に関わる全ての人が驚きと焦りに包まれたことと思います。

しかし、私たち畜産学科体育祭部門には確かな勝算がありました。夏休みから練り始めた応援合戦は「魁」をテーマに掲げ、その言葉通り東京農業大学体育祭至上初の試みをおりこんだ、まさに時代を先駆けたものでした。発案者である委員長は「1位か8位か（イチか、バチか）の演技だ」と言っておりましたが、きつとどの学科にも真似できないスタイルは、体育祭が順延となり、力を入れていた大玉転がし、学科リレー、先生頑張つてが省略された未曾有の局面にも私たちに確かな自信を与えてくれました。

体育祭当日、畜産学科は応援合戦の部第2位、競技の部第5位、パネルの部第3位と好成績を残し、総合優勝を飾りました。農友会厚木支部が、農友会厚木キャンパスとなった今年度、厚木に畜産学科が優勝旗を持ち帰ることができたことは、体育祭に向けてご尽力下さった先生方、先輩方、皆様方のお力添えあつてこそのものであつたと実感しております。ありがとうございます。

来年度の構想は既に練り始めており、再び「1位か8位か」の演技で畜産学科の名を轟かせたいと思っております。どうぞ来年度もよろしくお願致します。

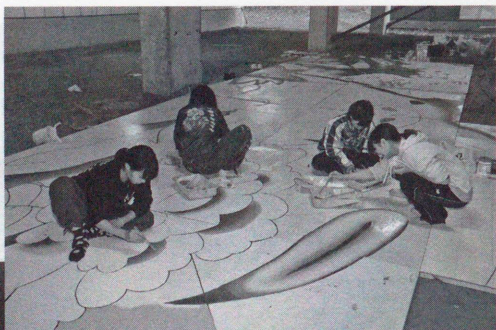
櫓

櫓部門では世田谷体育祭に向け横10メートル、高さ4メートルの大きなパネル装飾の作成を行っています。今年度は3年生2人と2年生3人のメンバーで夏休みから活動を開始し、パネルの作成や着色を含め約3ヶ月で作品を作りあげました。その間すべての時間が楽しいものではありませんでした。そして私自身作業が思うように進まず先輩方、同期の2人に迷惑をかけることもしばしばありました。しかしどんな時でも朗らかに、そして真摯に製作に向き合う櫓部門の先輩方や同期と過ごしたシーズンは私にとつてとても大切な時間となりました。

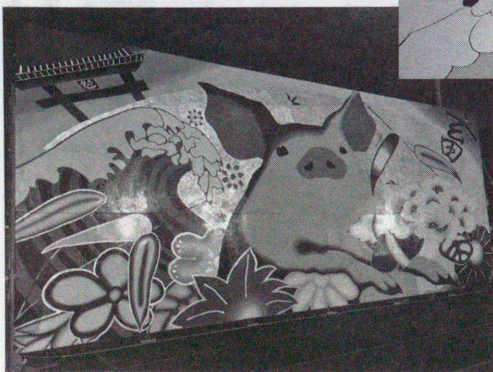
作製が終わり、いざ世田谷での設置作業につきましては畜産学科他部門の方々にも多大なるご支援、協力を頂きました。我々櫓部門の活動、パネル展示は多くの方々からの協力を経て実現するのだと実感することができ、私たちはこれからの活動への意欲そして責任感が一層増したと思います。

そして、今年度の作品は歴代畜産学科櫓部門の力強い作品とは一味違うものでした。背景の扇や紅型染めをイメージした花々は言わずもがな、メインとなる豚モチーフはその青からピンクへと変化する鮮やかなグラデーションは大変愛らしく多くの方々の目を引くものだったと思います。その結果、体育祭におけるパネル部門の表彰で総合三位を頂くことが出来ました。

来年度はまた違った表情の畜産学科らしい櫓を皆様にお



見せられるように一同努力し、励んでいきたいと思えます。



研究棟アート

研究棟アートとは、研究棟に飾る大きな垂れ幕のことで

す。
今年度も例年通り、湘北短期大学側には三年生がデザインしました蓮の花とクジャクの絵、けやき食堂側には二年生がデザインしました牛・馬・俵の絵を飾らせていただきました。

装飾部門の活動は夏休みの開始とほぼ同時に始まりました。昨年度の装飾部門は三人での作業でしたが今年度は一人増えて三年生一人、二年生三人の合計四人での作業となりました。夏休み中は布を切る作業から始まり、それと同時に布と布をつなぐ耳を作る作業をし、耳と布をミシンで縫い合わせる作業をしました。九月に入ってから布に絵の下書きをし、ペンキで絵を描いていきました。そして布を飾るためにロープを通し、十月二十八日に無事に研究棟に飾ることができました。

最初の布を切る作業はとても暑い中汗だくになり、ペンキで絵を描く作業では強風や天候に左右されながらの作業になりました。研究棟に飾られた垂れ幕を見てとても感動しました。そして、みんなで完成できた達成感、また収穫祭にたくさんの人に来てもらいたいと思いました。

収穫祭二日間は天候に恵まれ、破れることもなく収穫祭を見守ってくれました。今年度も無事に研究棟アートが完成できたのも本当に皆さんの皆様のご協力のおかげだと感謝しております。ありがとうございました。来年度も今年

家畜苑

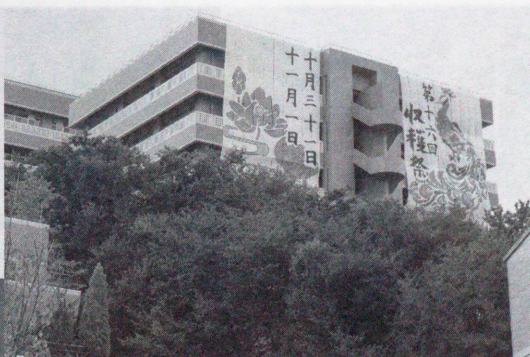
今年の家畜苑は三年生二人、二年生六人という三年生が少ない状況で収穫祭シーズンが始まりました。先輩方二人の確なアドバイスで、分からなかったことを一から教えてもらい、収穫祭では成功をおさめたと思います。男が六人に対して女の子が二人でしたがみんなで楽しく収穫シズンを楽しめることができました。

家畜苑の作業内容は講義棟下の広場に設置する家畜苑門、撮影パネル、展示する家畜の説明パネルやその背景パネル、案内看板の作成に取り組み収穫祭間近では家畜を展示する時の小屋を作りました。また、収穫祭当日ではヒヨコのふれあい体験、牛のブラッシング体験、バター作りを来客した方に体験してもらい、例年とは違う牛引きもしました。特にこの牛引きは体験している方に危害を加えないか心配でしたが無事何事もなくて来客した方に楽しんでもらえたと思います。

収穫祭の準備は八月の後半から開始し、牛引きで使う牛の調教から始まりました。始めた時期が早かったのもあり、つい遊びすぎてしまい準備がぎりぎりまでかかってしまいました。ですがメンバー全員が同じ目標を持ち収穫祭に向けて頑張れたと思います。家畜は畜産マネジメント研究室、家畜衛生学研究室、富士農場などのご協力で借ります事ができ今年も無事に家畜苑を運営する事ができました。また、他の部門の方や一年生の協力がありすごく感謝しています。

来年度は、今年以上に盛り上げていきます。

年度のような感動させられる作品を作りたいと考えていますので楽しみにして下さい。



体育祭

【結果発表】

総合順位	1位
競技の部	5位
応援合戦の部	2位
樽装飾	3位
神輿	2位
※神輿は厚木キャンパス内での順位	

東京農業大学農学部畜産学科畜友会 畜友会会則

第一章 総則

- 第一条 本会は東京農業大学農学部畜産学科畜友会と称する。
- 第二条 本会は事務局を東京農業大学農学部畜産学科内に置く。
- 第三条 本会は会員相互の親睦を図り、併せて畜産学科の発展に寄与することを目的とする。

第二章 業務

- 第四条 本会は第三条の目的達成のために次の事業を行う。

- (1) 会員相互の親睦
- (2) 講習会、研修会及び研究会発表の開催
- (3) 機関紙「ふじみの」の発刊
- (4) 大学行事（収穫祭等）への参加
- (5) その他第三条に付帯する業務

第三章 会員及び役員

- 第五条 本会の会員は次の通りとする。

- (1) 正会員 畜産学科の学生
- (2) 特別会員 畜産学科教職員ならびに大学院生

第六条

(3) 名誉会員 役員会の推薦を受け、総会の承認を得た者。

本会は次の役員を置く。

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 2名
- (3) 執行委員

- 委員長 1名
- 副委員長 2名
- 庶務 2名
- 会 計 2名
- 企画・渉外 2名
- 編 集 2名
- 監 事 4名

第七条

(1) 会長は会を代表し、会務を総理する。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはこれを代理とする。また1名は総務を他の1名は会計を分担する。

(2) 委員長は会長の指示を受け、執行委員会を統括する。

副委員長は委員長を補佐し、委員長不在の時はその代理をする。各委員長はそれぞれの会務を分担執行する。

第八条

- (1) 本会には連絡委員を置く。
- (2) 連絡委員は1、2年次からそれぞれ4名、各研究室から1名選出する。連絡委員は各学年および各研究室の意見を掌握し、連絡

第九条

委員会での意見を反映するとともに執行委員会の決定事項を会員に伝達する。

役員および連絡委員の選出および任期

(1) 会長は畜産学科長がこの任にあたる。副会長および監事は、会長が畜産学科教職員の中から推薦し、総会において決定する。

(2) 執行委員は、執行委員会の推薦に基づき総会において決定する。但し、委員長は3年次生、各執行委員の2名の内1名は3年次生、ほかの1名を2年次生より選出するものとする。尚、監事4名の内の2名は畜産学科教職員がその任にあたる。また、監事はほかの役員を兼任することはできず、その任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

(3) 執行委員に欠員を生じた場合は、執行委員会に諮り補充することができる。

(4) 連絡委員は、各学年（1、2年次）および各研究室（3、4年次）で協議のうえ選出する。また、任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

第四章 総会

- 第十条 (1) 総会は定期総会とする。

(2) 総会は正会員および特別会員を持って構成され、本会の最高意思決定機関とする。

第十一条

(3) 定期総会は原則として年一回、六月に会長が招集し、開催する。

(4) 臨時総会は会長が必要と認めた場合ならびに正会員および特別会員総数の4分の1以上の同意を得て開催目および招集理由を記載し、会長に提出する時招集開催することができる。

第十二条

(1) 総会は正会員および特別会員の4分の1以上の出席により成立する。

(2) 委任状は所定の用紙に署名捺印のうえ議長に一任する。委任状は総会の定足数に含まれるが、正会員および特別会員の5分の1を上限とする。

第十三条

(3) 委任状の検査は執行委員が行う。定期総会は次の事項を決議する。

1. 前年度の事業報告および収支決算報告
2. 次年度の役員
3. 次年度の事業計画および収支予算
4. 会則の改正

その他

総会における議長は総会においてその都度互選する。尚、必要に応じて議長は副議長を指名することができる。

第十四条

議長は書記2名と議事録署名人2名を選出す

る。尚、議事録署名人の内1名は畜産学科教職員とする。

第十六条 総会の議決は出席者の過半数によって議決され、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第十七条 総会出席者により執行委員の不信任を可決することができる。但し、この場合の出席者には委任状は含まない。

第五章 執行委員会および連絡委員会

第十八条 (1)第六条(3)の執行委員会は本会の最高執行機関たる執行委員会を構成する。

(2)会長および副会長は必要に応じて執行委員会に出席することが出来る。

第十九条 執行委員会は原則として月一回委員長が招集する。執行委員会は執行委員の3分の2以上により成立する。執行委員会の議長は委員長が勤め、出席者の過半数より可決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第二十条 執行委員会は総会の議決に基づき、本会の目的遂行に関する一切の会務を執行処理する。

第二十一条 執行委員会で議決された事項について、委員長は会長および副会長に文章で必ず報告する。

第二十二条 連絡委員会は委員長が総会前に必ず招集開催する。また、委員長が必要を認めた場合に開

催することができる。

(1)連絡委員会には執行委員および連絡委員が出席する。議長は委員長が務める。

(2)連絡委員会は次の事項を処理する。

1. 執行委員会で決定した事項の伝達。

2. 一、二年次および各研究室からの意見の聴集および意見交換。

(3)連絡委員会には必要に応じて会長、副会長も出席することが出来る。

第二十三条 本会の事業年度および会計年度は6月1日に始まり、翌年の5月末日までとする。

第六章 会計

第二十四条 本会の運営は会費および寄付金ならびにその他の収入を以ってこれにあてる。但し、第四条の目的を達成のため臨時徴収する場合もある。

第二十五条 (1)会費は年間二、五〇〇円とし、入学時に一括して一〇、〇〇〇円を納入する。編入・転学科学生は学年に 応じた金額を一括納入する。但し、一度納入した会費は返金しない。しかし、入学取り消しの場合はその限りではない。

(2)会費は会長および委員長連名で毎年6月に入学対象者に対して請求するものとする。本会の会計は、所定の形式に従って処理し、

決算はすべて監事の監査を経なければならない。

第七章 機関紙「ふじみの」編集発行

第二十七条 (1)第四条(3)の目的達成の為に編集委員会を設ける。

(2)編集委員会の委員は執行委員および正委員の中から若干名選出する。

(3)編集委員会の責任者は編集委員のうち1名が担当する。

(4)編集委員会は機関紙「ふじみの」の編集発行を責任もって執行する。

第八章 大学行事への参加

第二十八条 (1)第四条(4)の目的達成の為に必要に応じて委員会を設ける。

(2)設けた委員会は本会の目的達成の為に執行委員会の意思を受け運営する。尚、内規は別に定める。

(3)委員会の責任者は執行委員の内1名が必ず当たる。構成員については、正会員の中から必要に応じた人数を選出する。

第九章 監査

第二十九条 監事は本会が目的達成の為、円滑に業務を執行しているか否かを監査する。

第三十条

監事は前条目的の為業務監査および会計監査を行い、その結果を総会において報告する。尚、必要と認めた場合は臨時監査することができる。

第十章 付則

第三十一条 本規定の最終解釈は役員会で行う。

第三十二条 本会則は、昭和35年6月29日に制定された東京農業大学畜産学科、畜友会、規約を平成元年7月7日に一部改正し、それを元に平成10年2月20日に新たに東京農業大学農学部畜産学科、畜友会、会則を制定し施行する。本会則は、前会則の一部改正し、平成23年6月23日よりこれを施行する。

畜友会収穫祭内規

第一章 目的

第一条 本内規は東京農業大学農学部畜産学科畜友会会則（以後畜友会会則と称す）第28条によりこれを定める。

第二条 収穫祭は東京農業大学農友会厚木支部収穫祭規定第1条及び第9条に基づき収穫祭に参加する。

第二章 組織および役員

第三条 収穫祭を円滑に運営するため畜産学科収穫祭実行委員会（以後実行委員会と称す）として次の組織を置く（以後6本部と称す）。

1. 統一本部
2. 宣伝隊実行本部
3. 特別企画実行本部
4. 学内装飾実行本部
5. 家畜苑実行本部
6. 体育祭実行本部

第四条 実行委員会に次の役員を置き、会務を処理する。

- 統一本部顧問 若干名
- 統一本部委員長 1名
- 統一本部副委員長 1名
- 統一本部会計 1名

各実行本部顧問 若干名
各実行本部委員長 各1名
各実行本部会計 各1名

第五条 (1)統一本部顧問および各実行本部顧問は畜産学科教職員より畜友会会長がこれを委嘱する。

(2)統一本部委員長は畜友会執行委員、統一本部副委員長、統一本部会計、各実行本部委員長および各実行本部会計は統一本部委員長が畜友会執行委員会の承認を得た後、畜友会会長の了承を得てから委嘱する。

(3)統一本部および各実行本部の担当者は正会員の中から募集し、統一本部委員長がこれを委嘱する。

第六条

(1)統一本部顧問および各実行本部顧問は統一本部および各実行本部の指導にあたる。

(2)統一本部委員長は各実行本部を統括する。統一本部副委員長は統一本部委員長を補佐すると共に統一本部担当者と協力して各本部の円滑な運営活動を助ける。

(3)各実行本部委員長は各実行本部の運営を担当する。

第七条

実行委員会の機関として6本部会議および各実行本部会議を置く。

(1)6本部会議は、各実行本部顧問、統一本部委員長、統一本部副委員長および統一本部

会計ならびに各実行本部委員長、で構成し、畜産学科収穫祭全体の重要事項を審議する。6本部会議の議長は統一本部委員長がこれを務める。

(2)各実行本部会議は統一本部委員長、統一本部副委員長、各実行本部委員長および各実行本部担当者で構成し、各実行本部の運営活動を審議する。各実行本部会議の議長は各実行本部委員長がこれを務める。

第三章 会計

第八条 収穫祭の会計は特別会計として畜友会収穫祭援助費および農友会厚木支部収穫祭助成金ならびにその他の収入をもってこれにあてる。

第九条 予算は畜友会執行委員会で編成し、畜友会定期総会で承認を得る。

第十条 会計処理は別に定める。「会計処理取扱細則」によって処理する。

第十一条 決算書は統一本部がこれを作成し、畜友会執行委員会に諮り、畜友会監査を受けた後、畜友会定期総会で承認を得る。

第四章 付則

第十二条 本内規の改正は6本部会議で原案を作成し、畜友会執行委員会で承認を得る。

第十三条 本内規は平成15年6月1日よりこれを実施す

る。
本内規は前内規を一部改正し、平成23年6月23日よりこれを施行する。

ホンマ、おおきに

統一本部委員長

3年入江 駿 敬

畜産学科に入学して3年生と、早くも農大人生4分の3を終え... 畜産学科に入学して3年生と、早くも農大人生4分の3を終え... 畜産学科に入学して3年生と、早くも農大人生4分の3を終え...

今年度は、終夜作業自粛に伴い、例年より早め早めの作業を各... 今年度は、終夜作業自粛に伴い、例年より早め早めの作業を各... 今年度は、終夜作業自粛に伴い、例年より早め早めの作業を各...

体育祭は、雨の為順延となり、競技では玉入れと綱引きの2種目... 体育祭は、雨の為順延となり、競技では玉入れと綱引きの2種目... 体育祭は、雨の為順延となり、競技では玉入れと綱引きの2種目...

変な人たち

特別企画委員長

3年金子 泰 昭

早いもので僕もふじみのに掲載される文を書く学年になりました... 早いもので僕もふじみのに掲載される文を書く学年になりました... 早いもので僕もふじみのに掲載される文を書く学年になりました...

そんな2人との楽しいシーズンも終わり僕自身が委員長になり2年... そんな2人との楽しいシーズンも終わり僕自身が委員長になり2年... そんな2人との楽しいシーズンも終わり僕自身が委員長になり2年...

彼はとにかくいつもニヤニヤしています。日常生活では勿論ですが... 彼はとにかくいつもニヤニヤしています。日常生活では勿論ですが... 彼はとにかくいつもニヤニヤしています。日常生活では勿論ですが...

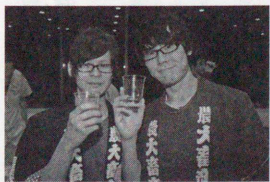
となりが彼は本番中もいつもニヤニヤしておりニヤニヤしながら楽... となりが彼は本番中もいつもニヤニヤしておりニヤニヤしながら楽... となりが彼は本番中もいつもニヤニヤしておりニヤニヤしながら楽...

は、順延の影響で世田谷キャンパスに神輿を持つていけなかったこと... は、順延の影響で世田谷キャンパスに神輿を持つていけなかったこと... は、順延の影響で世田谷キャンパスに神輿を持つていけなかったこと...

さて、来年度の統一委員長を務めますのは「鶴ヶ崎世結... つるがさ... さて、来年度の統一委員長を務めますのは「鶴ヶ崎世結... つるがさ... さて、来年度の統一委員長を務めますのは「鶴ヶ崎世結... つるがさ...

やはり、この1年間振り返ってみると、一人一人物... やはり、この1年間振り返ってみると、一人一人物... やはり、この1年間振り返ってみると、一人一人物...

最後にになりましたが、半澤学科長をはじめと... 最後にになりましたが、半澤学科長をはじめと... 最後にになりましたが、半澤学科長をはじめと...



変な後輩その2 山口智也

彼を三言で表すとならず者です。誰がどう見てもならず者なです... 彼を三言で表すとならず者です。誰がどう見てもならず者なです... 彼を三言で表すとならず者です。誰がどう見てもならず者なです...

2人とも俺についてきてくれて本当にありがとう... 2人とも俺についてきてくれて本当にありがとう... 2人とも俺についてきてくれて本当にありがとう...

僕は結局面白い人間になれなまま統本部を引退してしまっ... 僕は結局面白い人間になれなまま統本部を引退してしまっ... 僕は結局面白い人間になれなまま統本部を引退してしまっ...

甚だ簡単ではございますが... 甚だ簡単ではございますが... 甚だ簡単ではございますが...



宣伝隊部門委員長より

宣伝隊長

3年 綿貫 浩志

今年、畜産三年は僕一人でした。一人ということもあり、大変なことの方が多かったと思います。僕自身、人間として未熟なこともあり周りの人には迷惑をかけたと思います。みんなありがとう。

宣伝隊では三年生と僕ら流の色を出すためにケンカをいっぱいしました。抽選会、厚パレ、各駅、店回り、無料配布、ダンジェ、ジャズナイト、どれもスムーズに決まらなかったです。でも全てが、成功していたと思います。抽選会も規模拡大して、無料配布も今年から改善しました。来場者は減少し、宣伝隊として駄目なかもかもしれません。活動を始める前に、どういった宣伝隊にするのか、どう宣伝するのかと自問自答していました。副隊長は自分たちが楽しむ宣伝をしたいと僕らにっていました。僕は僕自身にできる宣伝活動をするために悶々していました。最後まで答えは出なかった気がします。収穫祭が終わった十一月はご飯の味がしなかったです。今こうして原稿書いて気持ちを整えようと、答えを見つけたるよりも、もがいていたことが一番大事だったのかなと思っています。答えが出ないのは、悪いわけではない。自分が畜友で学んだことです。

後輩は僕だけ四人いて正直引つ張っていける自信はなかったです。怒ることもあれば、僕も言われる。生意気な後輩もいたり、ついてきてくれる子もいた。四人ともがバラバラで、うまくまとめるのが僕の役目でした。これからは四人が新しい後輩と他学科と新しい宣伝隊を作っていく。尾内さんから僕、そして鳥、どんどん新しい時代になっていく。伝統は大事だけど、新しい事をし

これぞ畜産学科が誇る神輿

神輿隊長

3年 小川 直輝

事の始まりは、雨続く梅雨のある日、我々五人は浅草の真ん中におつと、言い忘れていた、五人とは誰のことか、紹介しよう。

五人とは、私、今年度神輿隊長を務めた、小川直輝。畜友会に携わり始めたのは、一年の夏で、気がついたら神輿隊長になっていた。お恥ずかしいことにはあほキヤラで、神輿には誰よりも熱を持っていたつもりであつたが、不器用でうまくいかないことも多々あつた。そんな私を隣で支えてくれたのは、同じく三年の敷地生光。彼女は、去年から共に、神輿部門で作業をしてきた。工具・機械を自在に使いこなす姿はほんまに女性なかと瞬思わせるほどだつた。彼女の絵画的センスには、この二年間でさらに磨きをかけ、神輿部門における重要人物となつた。次に我々三年についてきてくれた、二年の、眞子由衣。彼女は五人の中で最も芸術センス・繊細さに優れていると思う。実際に神輿を見ただければわかるが、下部の側板のきめ細やかな金貼・グラデーションを見事に成功させた色使いは、彼女にしかできなかった技術である。彼女は敷地に続き史上最強の神輿女子に来年なるであろうと、我々三年は期待している。次に同じく二年の、吉田昇平。彼は誰よりもガラスの心をもつている。彼は不器用な男だが、鳥居・飾り金具をはじめとすると多くの施しに貢献してくれた。彼の繊細かつ丁寧さありの神輿であると思う。バイトなどで忙しく、他メンバーよりも作業に来ることができなかった時もあったと思うが、作業に来た時は誰よりも取り組んでいた。彼の努力がなかったら、あの華やかな神輿はできなかった。最後に五人目二年の、湯山真仁。彼は、見とくわがままで赤ちゃんのような男だが、根は真面目で、私と同じくらい神輿に熱を持っている。彼は、ちよびり雑なところはあったが、昔から機械・工具を操る経験をしてきたこともあり、作業スピードは目を引くほどのものだつた。また、横の繋がりや縦の繋がりも大切に、リーダーシップを発揮してくれて、ふりだしに戻るが、本厚木から出てきた我々は、浅草駅前で一斉に空を見上げていた。いや、ビル群を見上げていたのだ。田舎も丸出してある。さておき、なぜ浅草に向向いたのか、浅草には神輿専

ていくことも大事。自分たちが十年後、二十年後の畜友を作っていくという自覚を持つてください。バラバラな四人だけど、その四人が協力すれば絶対にできる。四人いることには意味があります。

最後に活動した三年生、一緒にできて良かったです。先輩にも可愛がっていただきました。上下関係、同学年の広がりが大きくなりました。怒られ、理不尽だと感じる時もあります。無関心で傷つくこともあります。でも畜友に入つて、宣伝隊の隊長をしていなければならぬ、今の自分はいないと思います。三年生たちも感じていてと思います。これからは自分の夢にむかって進んでいきたいと思えます。このシーズンには自分にとっての通過点になっていきます。通過点をいっばい作ることで経験になつていくと思えます。鳥、三橋、未来ちゃん、百合子ちゃん、後はお願いします！



門店があり、職人さんが手掛けた神輿が多く展示されているのを、こっそり耳にしたからである。展示してある神輿を見たり、写メを撮つたりして、五人は携帯と我心に焼き付けた。ここから五人の時代は始まった。

夏休み開始と同時に本格的な作業は始まった。くそ暑い日差しを浴びながら、土台・担ぎ棒・桁組の制作に取り組んだ八月。屋根の骨組み、側板・堂のベースの制作に取り組んだ九月。堂周りの彫刻(春夏秋冬、松竹梅・正面・牛豚鶏)・柵・鳥居・飾り金具など繊細な作業に取り組んだ十月。そして十月は、完成式・厚木パレード・収穫祭・目目と大イベントがあつた。神輿部門主役の各イベントでは、全力で盛り上げた。厚パレで神輿の上に乗ったことは生忘れないうであらう。

今年から新企画として、本祭において神輿の練り合わせを行った。三学科の神輿部門が協力し、決行したというのもあり、すげー楽しかつたし、満足できた。来年も引き続き収穫祭を盛り上げてほしいと思つている。

さて、今シーズンを終えて、感じることは、満足いく・納得のいく、そしてやりきつたと思えるものを完成させることができた、ということ。結果は、金賞を逃がしたり、世田谷に神輿を持っていけなかったことなど、悔しいものもあつた。しかし、結果が全てではない、そう、五人が満足いくものができたかどうか、我々はみんな感じていた。

ここでもう一度、今年の神輿について書こう。今年の神輿は昨年までの神輿とは異なり、インパクトを全面的に重視して仕上げた。畜産神輿の伝統は引き継ぎ、今年度も形はほとんど変えなかつたが、畜産観を出したかったが故に、牛柄にしたり、カラフルな彫刻を施したりした。結果、可愛らしい神輿ができた。私は、思つていたものができたと思つている。

最後に、今シーズン携わつていただいた先生方・学校関係者、共に作業してきた神輿隊員をはじめとする畜友会の仲間へ、今ここで感謝の気持ちを申し上げます。ありがとうございました。

そして、真に率いる来年の神輿は、もーつといいもんがでると期待している。突き当たることや、作業停滞することはあると思うけど、みんな力であわせて、んで、何より楽しく、頑張つてな、応援してくれよう！

ほんまに今年ついてきてくれたメンバー全員に感謝しとる。ほんまにありがう。



第124回体育祭

体育祭委員長

3年 江田 匠

ついに、体育祭部門委員長としての最後の仕事です。僕はなんとなく暇つぶしのために統一本部に入り、希望もしていない体育祭部門になり。いつの間にか委員長となり、いつのまにか後輩ができて。最初は僕が委員長で平気なのか不安で元委員長の小菊さんに相談しました。そんな時、お前の思うように行動して満足できるようにやればいい、という言葉をいただいてからそんな不安は吹っ切れ、破天荒な体育祭委員長の出来上がり。

今年度の体育祭は雨男である僕、体育祭委員長のせいで雨となり順延となつてしまい11月3日に行いました。そんな中で後輩たちは先輩たちの引退が伸びたと喜んでいましたが、正直なところ、疲労困憊の僕たちは2日に行つて引退したかったのが正直な気持ちです。ちやげ、まごぶ、やん、まるでサルと犬のように顔を合わせれば喧嘩ばかりのあすか。自由すぎる委員長についてきてくれてありがとう、おかげでシーズン中も楽しく過ごさることができました。ちやげ、ぶ、やんは委員長からのイタズラももうないよ。思い切つて自分たちの体育祭を創りあげ、125回の体育祭で最高のものを見てください。

会室の扉を開けるといつも明るくお疲れ様です!!と授業が終わつた僕を迎えてくれ、シーズンモードに切り替えてくれた3人の後輩の挨拶、最後まで疲れたと僕らの前で弱音を吐かなくなつた3人。僕にして自慢の後輩です。他の部門には言えないこともたくさんありました。なんと1年生に畜友の体育祭つてこんな感じですよってプレゼンするの作業をしてる写真が無くて困るくらいにきつてやそつて。シーズンの始まりに体育祭のメンバーで千葉にキャンプに行つちゃう委員長の部門です。寸志でもらつたストゥッチバンドでゴムはうちんをして遊んだり、作業よりイタズラの時間の方が長かつた気がするくらい。最初に暇つぶしで畜友に入ったと言いましたが、気が付けばがむしやんに頑張つて楽しんでる自分がいました。畜友が入つて体育祭部門でよかったです。このメンバーで最後までやれたことが何よりも僕の宝となりました。去年も体験した表彰式、自身はあつたがなかなか学科名が呼ばれない、第3位醸造学科、第2位農学科、今年もダメだったのかと諦めか

収穫祭を終えて

櫓裝飾委員長

3年 押木 茜

畜産学科統一本部の一員として、また、櫓部門委員長として私の役目は全て終了しました。

今年の櫓を飾つた動物は豚でした。どの学科も凛々しく描きあげる櫓に豚が中心になるとは恐らく誰も予想していなかったことでしょう。私もとても想像できませんでした。そのため、まず始めたことは資料探しでした。資料すらまともに見つかりません。畜産学科の生徒であっても、資料無しの状態から櫓のデザインを考えることは容易ではありませんでした。畜産経営の本や伝染病の本、と畜の本など豚について記載されている本をくまなく探しました。また、豚の後ろを飾る鮮やかな柄は沖繩の紅型という伝統染色技法を参考に描きました。これは、私が母・姉から譲り受けた振袖の柄です。成人式を迎える前からこの柄を描こうと決めていました。

櫓の完成に向けてこだわっていた点がいくつかあります。まず一つ目は、意見をもたうことです。後輩を始め、作業中見に来てくれた全ての人に感想・意見を聞かせてもらいました。辛めな意見も真摯に受け止め、より良い櫓の完成を目指しました。だからこの櫓は櫓部門だけで作り上げたものではありません。感想や意見をいただかなければあの作品は完成しません。二つ目は時間の使い方です。作業をするにあたり、常に体調が万全であつてほしいと考えていました。作業は決めた時間内で行い、体調管理に気をつけるように注意を呼びかけていました。三つ目は協力することです。統一本部の方ももちろんのこと、他学科の櫓部門と協力することが大切だと考えていました。厚木の櫓は切磋琢磨

けた次の瞬間。第1位畜産学科!と呼ばれ、今年は泣かないで笑うと決めていたのに涙が出てきました。また、肩の荷がおりた感覚もあり、文章には表わされない感動がありました。後ろを振り向くと、大泣きのちやげ、ぶ、やん、あすか、先輩方、一緒に頑張つて来た皆が泣いていました。優勝つてすごいよ。本堂に、優勝杯の重みつてはみんなに嫌われるような部門だけれど、嫌われてなんぼ、最後はこつて肩抱き合つて喜ぶんだから。それと、優勝もうれしいけれど、体育祭部門でしか味わうことのできない喜び、嬉しさっていうのがあります。それは、自分たちの考えたダンスを空き時間とかに、ふざけながらも踊っているみんなを見るとときです。そんな時、自分たちで作ったものが間違いないと思え、もう頑張つて行こうっていう気持ちになれます。しかし今回は、本番の応援合戦は初めの立ち位置から間違え、ウエーブも普段と違う人が前にいたり、声の出すタイミングじゃないところで声が聞こえたり。練習の時よりも下手だったと思うけれど、今までの練習してきた中で一番気持ちのこもった演技になり畜産学科らしいものになったと自分は思います。女子は知らないと思うけれど、毎回ハカを踊る前にエンジンで男子には僕がひと声かけます。本番の時、失敗してもいいから声出して、審査員の度肝を抜いてやろう、よしや行くぞ!と声をかけました。最高に気持ちよかつたのと同時に最後なんだな!と、さみしい気分にもなります。こんな真剣に体育祭で楽しめたのもみんなのおかげです。ありがとう。

いよいよ交代式、1年間背負つてきた委員長法被を誰に託そうか、最後の最後まで悩んでいただけと、ちやげに任せました。理由なんて簡単です。一番涙もろいし、一番体育祭を楽しんでいる感じがしたからです。だけども、最後の決め手は作業中の僕ら先輩の前でクッション持つてきて寝た凶太の神経の持ち主だからです。第125回体育祭は総合優勝だけじゃなく全部で1位を取つてください。さてさて、こんな雑談はよして、皆さんが知りたいたいと思われる第124回体育祭の順位発表です。櫓3位、競技5位、応援合戦2位。畜産学科は4年ぶりの総合優勝に輝くことができました。畜産学科の開きで、昨年の応援の8位と目標の1位を掛けて、1か8か背水の陣で挑みますと言いましたが、なんと有言実行、総合優勝で1位になりました。協力していただいた諸先生方、一般学生、OB・OGの皆様は深く感謝します。



磨という言葉が相応しいと心から思います。

輝かしい去年の櫓優勝から一年が経ちます。当時の感動や苦労は今でも鮮明に覚えています。あれから、私にできることは何か、櫓が完成する時までずっと考えていました。今になって振り返るとずつと試行錯誤をして櫓を作り上げることが私に課された役目であつたと思えます。去年の優勝には及びませんが、畜産学科櫓は二年連続の入賞を果たしました。もう私にはあれ以上の櫓は作ることができません。たくさんの方の支えがあつて得ることができた三位という順位に反省する点も後悔もありません。やりきつた気持ちでいっぱいでした。いただいたたくさんのおめでとうや、表彰台の前で交わした握手、初めての胴上げ、そして畜産学科の総合優勝に貢献できたことが何よりも嬉しかったです。今年も上出来な櫓の完成となったのではないでしょう

か。統一本部の一員として、櫓委員長として得ることの多い部活動でした。支えて下さつた全ての方に感謝します。



第16回厚木キャンパス収穫祭

装飾委員長

3年 小野 美晴

ついにわたしがこの「ふじみの」で装飾部門委員長として文章をつづる時がきてしまった。実はこの原稿を考えている今日は何んと締め切り日の前日である。たくさんの方々の手に渡るこのふじみので少しはおもしろい文章を、と考えていたら締め切り日の前日になってしまった。

みなさんご存じの通り畜産学科統一本部は世田谷キャンパスで行われた第124回体育祭で総合優勝を勝ち取ることができた。という話は他部門の委員長達がたくさん話すと思うのであえてこの場では話さないでおこうと思う。

わたしが畜産学科統一本部での活動を終了してからはや一か月半が過ぎようとしている。最近のわたしはまあまあアルバイトを頑張ったり研究室に通ったりと元気にすごしている。昨年この時期のわたしはいわゆる燃え尽き症候群であったと思う。毎日夕方に集まり、みんなと同じ釜の飯を食べ、眠い目をこすりながら作業をすすめ、明け方仮眠と言ふ名の睡眠をとる。こんな終夜生活をか月半も続けていたら終夜のないうつがとも物足りなく感じていたのだと思う。だがしかし今年はずいぶんやり切ったという気持ちがあったのではないかとと思う。

「ところで装飾って一体何やってるの？」

統一本部の活動をあまりご存じない方はそう思うであろう。畜産学科統一本部装飾部門は研究棟に掲げる3枚の垂れ幕をデザイン制作している。大きさは横がだいたい10m、縦が14mである。はじめは西日暮里に売っていた450メートルくらいの長い長いたの白い布だ。畜産学科の装飾は本年度、昨年度とは違い終夜の作業はあまりなかった。終夜作業ができなかったというの理由のひとつであるが、計画をたてその通りにすすめられたというの大きな理由のひとつである。夏休みに入ってからわたしたちはすぐ準備をはじめた。真夏の体育館で布をきったり、木くずのだらけのミーティングルームで肩凝りに

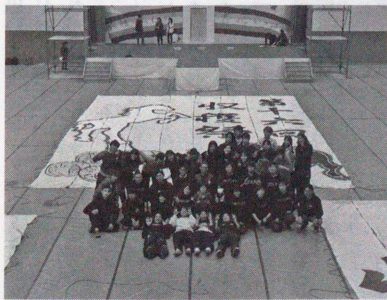
悩まされながらミシンで布をぬったり、たまにはできてきた糸くずを丸めて遊んだり。気づけば夏休みは終わり後期の授業が始まっていた。後期はひたすらペンキを塗った。完成して飾られた時の達成感はいままでの苦労を忘れさせてくれるものだった。

ちなみにわたしは畜産物利用学研究室に所属している。収穫祭では自分たちで作ったハム・ベーコンを販売している。そのため昼はハム・ベーコンの製造、夜は畜友会という生活を送っていた。肉の整形中は今日は何時から体育祭練習だろう？炊き出しは何時？今日の作業にはどこまで進めておけば計画通りなんだ？夜になると次はいつ製造なんだ？整形か？燻製か？手返しのみか？はたまた包装なのか？明日は朝何時に学校にいけばいいんだ？そもそも今日は何曜日なんだ？収穫祭まであと何日なんだ！？！？そんな日々の中で不覚にもみんなの前で目から塩水がでてきてしまつて周囲を心配させてしまったことはこの日の話である。

ここまで長々とつづってきたがひとこと言えることはやっぱりここまでやってきてよかったということだ。畜友やつて何が楽しいの？など聞かれたこともあった。そのときはうまく答えられなかったが今ならうまく答えることができそうだ。

そしてありきたりだがわたしに関わつてきてくれたすべての方に感謝の気持ちでいっぱい。畜友会3年生11人。なんだかんだ誰よりも信頼していた。たくさん相談にのつて下さったOG・OBの先輩方。最後に頼りないわたしが支えてくれた2年生。わたしがいなくてもさくさく作業をすすめてくれた。夏休み明けあたりから来年は安心だと確信していた。来年度は今年度同様、いや今年度以上の作品を見せてくれるのを願つていつも様にしてゆこうと思う。

はなはだ簡単ではございますが本年度畜産学科統一本部装飾部門委員長の最後の挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。ありがとうございました。



家畜苑

家畜苑苑長

3年 興 柊 史 也

今年の家畜苑は3年生2名、2年生が6名の計8名でスタートしました。家畜苑は、畜友会の中で人数が一番多い部門です。人数が多いのでまとめるのは大変でしたが、みんなと楽しく仲良くシーズンを過ごすことが出来たと思います。昨年より人数が少ないため、今年は昨年以上に苦労をするのではないかと不安でしたが、みんなの協力もあり、昨年よりスムーズに作業を進めることができましたと思います。

収穫祭当日は、2日間とも天気恵まれ大盛況に終わりました。沢山のご協力があったので家畜苑の開催、成功になりました。ありがとうございました。

今年の家畜苑は、人数が少ないことと新企画の準備で昨年よりも早い時期から作業に取り掛かりました。新企画では、牛引きを実施しました。引いていただく牛の調教が、家畜苑の一番初めの作業となりました。他にも家畜の小屋の組み立て、小屋の後ろに飾る絵、記念撮影用のパネルや動物たちの説明パネル、家畜苑の入り口となる門などの作成をしました。どの作業もとても大変で、牛の調教等で作業時間も短かったと思いますが、みんなが一生懸命に取り組んでくれたおかげで、無事すべて完成させることができました。先輩方、先生方には、今年も成功だと言つて頂き、頑張つて良かった、終わつたんだなどホツとしました。

今年も家畜衛生学研究室、畜産物利用学研究室、家畜繁殖学研究室、畜産マネジメント研究室、富士農場、他にも多くの方々の助けがあり、第46回家畜苑を開苑する事が出来ました。今年も例年通り、バター作り体験、牛のブラッシング体験、ヒヨコふれあ

い体験、記念撮影コーナーと、新しく牛引き体験を企画しました。どの企画も大人気でした。今回の企画で一番力を入れた企画はやはり牛引きです。初めての企画だったため試行錯誤しながらやり方を決めていきました。最初は、反対の意見も多く、本当に調教できるのか、子供に引かせて大丈夫なのかと色々なことを言われました。しかしそのような言葉に負ける事無く、みんなで毎日のように牛に触れ合いしっかりと調教して、先生方の許しもあり、晴れて牛引きを行うことができました。知名度が低かったため多くの人達に牛を引かせることは出来ませんでした。体験した子供達は楽しそうに、物珍しそうにしていて、やつて良かったと思つていました。

お年寄りから小さな子供たちまで、幅広い年齢層の方々に来苑して頂けました。家畜苑の毎年のテーマである、幅広い年齢層の方々に楽しんで頂けたと思います。

家畜苑は、とても忙しい部門だと思います。しかし、収穫祭当日の充実感は半端じゃないです。来年も存分に楽しんでください、そして楽しんであげてください。

最後になりますが、改めて各研究室、富士農場、力を貸して下さいました先生、生徒のみなさんありがとうございます。昨年より今年、今年よりも来年と家畜苑が少しずつ良くなっていく事を切に願うとともに来年度の家畜苑の苑長を中心とする家畜苑メンバーの活躍を期待しています。



編集後記

今年も、ふじみの第52号を無事発刊することができました。今、こうして皆様をご覧になっていることを、心よりうれしく思います。

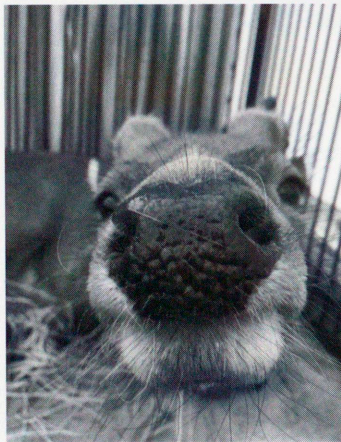
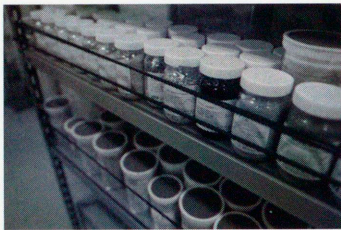
第16回収穫祭では、新たな企画として新学生会館での神輿の展示・投票を行いました。毎年恒例の野菜無料配布や家畜苑も、大盛況に終わりました。開催者も、来場者も、皆充実した時間を共有できたのではないのでしょうか。

また、第124回体育祭では、畜産学科が念願の総合優勝を果たし、厚木キャンパスに5年ぶりとなる優勝旗を持ち帰ることができました。今後も総合優勝を目指し、尽力して頂きたいと思います。皆様のご活躍を祈っています。

この『ふじみの第52号』が、今後の畜産学科の更なる発展を担うものになれば幸いです。

最後になりましたが、本誌を発刊するにあたり、お忙しい中ご寄稿くださった先生方、学生の皆さん、ならびに会員の方々に深く御礼申し上げます。

編集委員長 3年 敷地 生光



平成28年3月20日 発行

“ふじみの”第52号

ふじみの執行委員 敷地 生光
外内 万夏

発行者

神奈川県厚木市船子1737
東京農業大学農学部畜産学科畜友会
電話 046(270)6220(総務課)

印刷所

東京都荒川区西尾久7-12-16
創文印刷工業株式会社
電話 03(3893)0111

